

中し、佛に終る。三聖一徳にして異方、三教異なりと雖も、その化一なりと。琴亭の傳、詳かならず。加藤不爭、又聖學知津あり。

(六)儒釋道 これを彼に見るに、隋の世、文中子あり、その中説、問易篇に、三教於是可一といへり。之に次いて、白居易の三教論衡、劉謐の三教平心論、林兆思の三教會編、陶宗儀の輟耕錄等、皆之を言ふ。本邦に於ては、はじめに空海あり、三教皆歸に曰く、聖者人を驅る、教網三種、釋李孔、是れなり。深淺隔ありと雖も、並に是れ聖道、若し一羅に入らば、何ぞ忠孝に負かむと。文保年間、五山の僧大龍あり、幕府時代には、無隱の心學典論あり、曰く、夫れ中華聖人の道三あり、曰く孔子、曰く老子、曰く佛。孔子は儒術を以て天下に教ふる者なり、老子は虛無を以て天下に教ふる者なり、佛は諸方實相を以て天下に教ふる者なり。夫れ然る後に、天下の教、鼎足して立ち、聖人の道、大に備はると。桑原空峒、三教一致の著あり、空峒、元と書家なり、名は守雌、字は爲籛、別に方外閑人と號す。平安の人、父正員、醫を業とす。空峒、五歳にして、好んで字を書し、十二歳、筆札の美、貴紳の間に稱せらる。稟性孱弱、夙に隱逸の志あり。二十五にして、世事を謝し、自ら髡して、婚官せざるを示し、唯だ讀書を以て事となす。はじめ、合田晴軒に従つて、性理學を受け、業成りて後、教授し、餘暇、益す筆札を研究し、歷代諸家の論説を博覽し、唐宋以後の墨池譜法叢記を抄録する

こと、前後數百卷、又周秦漢魏より唐宋元明に至るまで、名人の眞跡遺墨を臨摹すること、殆んど四十年。藏儲の富、比肩するものなし。故を以て、中年以後、字を請ふもの多く、儒名爲に掩はる。延享元年歿す、年七十二。

(七)神儒釋道 すてに、いづれか三教の調和を主張するもの、又自ら之に論及す、空海大龍の如き、皆是れなり。

如上調和派の主とするところは、一主義を立つるよりは、むしろ、その撞着せざるを確證せむと欲するものなり。而して、その多數は、諸教の極致、いづれか善を爲せといふに非ざるものぞといふを以て言となす。然れども、予は、這般調和の、殆んど無意義なるを思ふこと、數ばなり。その結論、全く同じとするも、必ずしも、之を均一するを要せず、何となれば、議論の進程を考察せざるもの、斷じて、學問的ならざればなり。加ふるに人情の常、唯だ同を擧げて、異を舍く、かくの如くして、差別を抹殺せむとするもの、比々として、皆是れ。學術研究の眞精神と背馳すること甚しく、その旗幟鮮明ならず、影響の決して多からざる、亦た怪しむに足らざるなり。



## 第十九章 折衷及び考證學派

折衷學派は、諸派軋轢の劇甚なりし反動として、新に興起し漢唐宋明、合せて之を取らむとするものにして、その學風、決して伊物二子の固僻なるに似ず、又如何なる學派とも調和し易きものなり。而して、其首に居るものを細井平洲となす。その時を謂へば、葦園の學、正に中するの日なり。

細井平洲、名は徳民、字は世馨、通稱甚三郎、又如來山人と號す。その遠祖は、文學を以て宇多醍醐の二朝に従へし紀長谷雄なり。父正長、尾張知多郡平洲村に在りて農を業とし、二子を生む。伯は甚兵衛、正方、叔は即ち平洲なり。平洲、享保十三年を以て生る。幼より大志あり、農に服するを欲せず。年十六、京師に遊び師を求めしも得ず、留まること一年、郷に歸つて、書を讀む。父母將に田を分つて、その資となさむとす。平洲曰く、見、農に非ざるを以て、田は用ふるなしと。之を嚮いて、二百金を獲、盡く書を購ふ。この時に方り、中西淡淵、名古屋に於て、叢桂社を結び、諸生を教授す。平洲一見、大に悦んで曰く、圖らざりき、我が師の邇きに在らむとは、と、遂に贊を納れて、弟子となる。年十八、長崎に遊び、小河仲

栗を主とし、飛鳥子靜と友たり。三人兄弟の交を結び、相與に切磋すること三年、平洲偶々其母の病を聞き、即ち東歸せしも及ばず、哀悼の餘病を得、壽に在ること歲餘。年二十四の時、その師淡淵、社を江戸に移す。平洲亦た之に従つて往き、帷を下して教授す。當時平洲甚だ貧窶、その兄亦た故ありて産を破る。因つて、父を尾張より迎へて、孝養を盡す。すてにして、仲栗子、靜、皆長崎より來り、平洲と同居す。子靜なほ娶らず、平洲、仲栗ともに妻子あり、三家同住、年を経、一も間言なかりしといふ。すてにして淡淵歿す、平洲乃ち秋山玉山、瀧鶴、幸澁井太室、南宮大湫、木下蓬萊等と交遊して、經術を究め、後進を誘掖するを以て己の任となし、名聲日に隆、弟子大に進む。こゝに於て紀州の香巖公、米澤の鷹山公、及び列侯貴戚、之に師事するもの、頗る多し。はじめ、淡淵の經を講ずるや、漢唐新古の異同に拘らず、人の求むところに従つて、或は漢唐の傳疏を用ひ、或は宋明の註解を用ふ。仍つて、仁齋徂徠が漢唐諸儒の誤謬を指摘し、之を誹議せしを以て、己の力量を知らざるものとなし、常に曰く、聖人の道は、學問の深淺に在らずして、全く成徳育才、その器用を盡すに在り、と。平洲の經を説くや、専ら師訓を守り、大義を主提して、字句に拘泥せず。常に曰く、天地ありて後に人あり、人ありて後に聖人あり、聖人ありて後に聲經あり、聖人の人に於けるや、頼なり。今頼を以て其書を讀むに、不言の妙あり、其間に存す。夫の



妙は思うて得べきも、掲げて人に示すべからず。故に古今の註家、之を章句を釋くといふは可なれども、之を經を釋くといふは、未だ可ならず。之を經を釋くといふは、尙ほ可なれども、その以て今日に施すべきに至りては、未だ盡さざるなり。と。又曰く、聖學の要は、徳を成すに在つて、學派に在らず。と。故に平洲の門に在りては、學派の區域あることなく、人をして、その好むところに従つて、之を講ぜしめ、唯だ材徳を成就するを期するのみ。

平洲、固より政治の才あり、諸侯之に問ふに國政を以てす、而して、その爲に謀畫せしところ、終身外人に謀らず、往復の書、又稿を存せず。故を以て、今その詳を知る能はず。四十四歳の時、米澤に赴き、留まること一年。鷹山公、以て一國の師表となす、後來公の治を稱するもの、平洲與つて力あり。四十九歳の時、米澤の學校、興讓館、新に成る。平洲、又往いて留まること一年、その政を定めて歸る。五十三歳の時、はじめて尾張侯に謁し、その知遇を辱うし、大に學政を振作し、寛政八年、又米澤に赴き、留まること五旬にして還る。享和元年歿す、年七十四。天保六年に及び、その嗣世克、遺稿を整理して上木し、名づけて嚶鳴館遺草といふ、觀るべきもの、少しとせず。

平洲の人となり、溫厚の君子にして、且つ治民に長ず。故を以て學界の論争と殆んど

相關せず。之に次ぐものは、片山兼山、山本北山等にして、先づ蒞園學派を攻めて、自己を標榜するを主としたり。蒞園の衰亡は、主として、此に起因す、而して、兼山は、その初、蒞園の末流に浴し、後之に叛きしものにして、要するに、舉世漸く古文辭に厭きたる趨勢を表示するものなり。

片山兼山、名は世瑄、字は叔瑟、通稱は東造、享保十五年を以て、上野國平井村に生る。家世農を業として資産あり、十七歳江戸に遊び、鶴殿本莊に従つて學び、その塾中に寄寓す。本莊は、服部南郭の門人、最も修辭に長じ、蒞園一派の推重するところとなりしものにして、自ら處ること亦た頗る高く、許可するところ極めて少し、而かも、兼山を遇すること、獨り厚く、兼山又之に服し、益す修辭を研精せしが、固より其嗜好するところに非ざりしを以て、翻つて經義を究め、日夜怠らず、遂にして本莊の介を以て、南郭の門に入り、秋山玉山と交驩す。玉山將に熊本に歸らむとするや、兼山が篤學にして貧困なるを憫み、本莊と相謀り、之を熊本に携へ、藩學時習館に寄寓せしむ。幾もなくして、生員に充てられ、十人扶持を受けしが、居ること數年にして、辭して去る。こゝに於てか、京阪地方を漫遊すること一二年、一も其意に當るものなかりしを以て、再び江戸に往きて、本莊の家に寓し、深く蒞園の學を究め、特に經義に長ず。兼山、かつて本莊の介を以て、宇佐



美濃水に謁す。濃水は親しく徂徠に學びしものにして、經義を以て專務となし、師説を維持するを以て、その任となせり。濃水、兼山の篤學なるを見、本莊と相謀つて、その義子となす。時に濃水、出雲侯の侍讀たり、兼山も亦た同藩の儒員に蔭補せらる。居ること數年、その學殖益す深く、竟に疑難を徂徠の説に生じ、反覆熟考、一旦大に悟るところあり、將にその濫善を辨明せむと欲し、これを濃水に問ふ。濃水たゞ師説を信じて、その得失を論ぜず。多方回護して、其言を然りとせず。兼山、乃ち經史に考證し、誤謬を糾正し、是非を明晰にす。濃水窮して、復た争ふを欲せず。兼山亦た意を枉げて、苟くも従ふを欲せず。遂に本姓に復歸するに至れり。時に旗下の兩番に遠山修理といふものあり、兼山を招き、裏四番町の自邸に居らしめ、給するに衣食の料を以てす。時に安永元年、兼山四十三歳といふ。こゝに於て、生徒の來集するもの漸く多し。兼山、修辭の學を厭棄し、専ら經義を教授す。その學、古註疏を以て子弟に教授すと雖も、固より之に拘泥せず、折衷學といふもの、始めて、こゝに起る。こゝに於て、井上金峨、豊島豊洲、山本北山等、相繼いて、堦礎相和し、遂に一大學派を形成するに至れり。かくの如きは、前に述べし如く、氣運の然らしめしところ、世を擧げて、越國一派に倦きたる結果に外ならずと雖も、兼山及び金峨首唱の功、固より其多きに居るといはざるべからず。

兼山、濃水を辭してより、其死に至るまで、僅に十二年、講學長からずと雖も、聲價愈々高く、人と爲り、豪邁卓宕、好んで窮達を誹議せしを以て、之を妬忌するもの、亦た少からず。唯だ村上笠間安中、壬生鳥羽、犬山の六侯、己を卑うして、之を聘し、弟子の禮を執つて、經藝を受け、又厚祿を以て、之を招致せむと欲す。兼山肯んぜず。會ま之を尾張侯に推舉する者あり、兼山、侯の好學を聞き、細井平洲と同じく謁を釋かむとす。而して、平洲、其地の産なるを以て、先つて徵引を蒙り、兼山、江戸の邸館に參謁し、群書治要校定の任に與りしが、幾もなくして、喘痰を患ひ、功未だ竣らずして歿す。時に天明二年三月、年五十三。兼山、纔に知命を過ぎて逝きしと雖も、門下の才俊、少からず。陳穀山、村ト總、萩原大麓、小林龍山、葛山葵岡、久保筑水、菅葛陵等、皆師説を祖述して、終始變ぜず。號して山子學といふ。その學を觀るべきもの、山子垂統あり。その中、下の言あり。曰く、物氏博辨にして、種種の書を引立て、附會し、人の目を亂る故、人人それに眩きて、是非善惡を辨るに追あらず、何かは知らず、向上のことならむと思ふ故なり、歎ずべきことなり。總體、物氏の書は、疎妄多きとにて、文集などは殊に甚し。物氏の學は、雜貨肆を觀る如くにて、經學文章兵法百技の事まで、へ手を出したる故、にぎやかなるとにてはあれども、多岐亡羊にて、いづれも、その要をば得られぬと見えて、胡椒丸呑の論のみ多きなり。その見識に特操な



き故、前後齟齬することのみ多きなり。世の人、それを知らざるは、物氏の書を読むとは云へども、亦た善く讀む人なきが故なり。と書中述ぶるところ、大抵この類。蓋し兼山は、自説を體系的に構成するよりも先に、菴園の學を攻むるに急なるものにして、折衷の一派に於ては、正に葦路山林を啓くものといふべきに似たり。

井上金峨、名は立元、字は純卿、享保十七年を以て江戸に生る。父祖皆醫を業とす、金峨業を改めて儒生となり、駒込に僑居し、帷を下して教授す。はじめ、西條侯の文學川熊峰に從つて伊藤氏の學を修め、後又井上蘭臺に門に遊び、物氏の説を窺ひしも、兩つながら服する能はず。こゝに於て、別に一新機軸を出し、訓詁は漢唐を取捨し、義理は宋明に出入し、就中詞章に於て、菴園の陋習を排撃し、詩は中晚兩唐を取り、文は韓柳歐蘇を推す。近世詩文の醇正、金峨之を啓きし者にして、江戸の學風、爲に一變せり。金峨、東叡王府に仕へて、その記室となり、天明四年、駕に從つて、日光山に居り、留まること數日、途中病を獲、駕に先つて歸り、遂に其年六月を以て歿す。年五十三、門下名あるもの、尾崎稱齋、蓋鳩陵、梅澤西郊、原狂齋、篠本竹堂、岡四溟、熊箕山、菊池南陽、吉篁墩、劉桂山、下田芳澤、菅東海、龜田鵬齋等あり。その著述の重要なるもの、辨疑錄、讀學則、經義折衷、匡企錄等あり。

經義折衷は、瑣々たる一小冊子に過ぎずと雖も、金峨の本領を發揮して、剩すなく、彼

士に於ては、朱晦菴、王陽明の二人を擧げ、我邦に於ては、仁齋、徂徠の二家を列し、古今の學術、こゝに留まるとなし、因つて、其長を併せ取らむとするなり。その仁齋を論ずるや、乃ち曰く、趙宋以下、卜醫家の書の如きも、亦た能く性理を言ふ。或は陸王あり、彼を換へて此を改む、亦た全然之に勝つ能はず。我が東方、仁齋先生出づるに及びて、ひとり能く斷然程朱諸家を以て禪儒となし、復古の業を首倡す。これ千古に傑出して、倭夏未だ其だ有らざる所以なり。唯だその惜むべきは、詩書鄒魯、岐れて二途となり、孔子と先王とを視る、猶ほ後世儒家各門戸を建て、以て町畦を分つ如し。こゝに於てか、孔子の道、顧るに自ら小なり、遂に王道、或は儒學を以て斯道を號稱せむを意ふ。その他、訓詁の間、字異意同の如き、枚舉に暇あらず。之を要するに、蒙昧の業、創造の言、其れ及ばざるあり、固より其所のみ、深く此を責むるに足らず。但だ當にその斯に功あり、識見絶倫、古今比なきを推すべし。と、その徂徠を論ずるや、乃ち曰く、仁齋伊公、復古の業を首唱し、之を我が東方に闢く、その功偉なり。しかも猶ほ往來流行の説を建て、亦た未だ宋儒諸家を割愛する能はず。故に之を濯うて、洗然たる能はず。豈に復た惜むべからずや。徂徠先生、こゝに特見あり。曰く、道は先王の道なり。天下を安んずる道なり。要は長人安民と敬天とに歸するのみ。と、この説、一たび出て、天下の學者、各徳を己に成し、安民の道を行ふを知る。



孔門の教、庶幾はくは復すべし。江漢以て之を濯ひ、秋陽以て之を暴らす、皜皜乎として向ふべからざるのみ。然りと雖も、余が先生に取るあるは、特にその根由する所の説のみ。唯だ其人と爲り、奇を好むの癖あり、英邁の資を以て、之を言語文章に發し、家を立つるに急、その説の合ふと否とを顧みず、これ議せざるべからざるなりと、之を要するに、金峨は各家學說の間に存する歴史的關係と倫理的推渡とを審にし、之を打して一丸となすさむとするものにして、謂ゆる折衷の眞本領を自得したる者といふべきなり。

山本北山、名は信有、字は天禧、通稱は喜六、家世幕府に事ふ。北山夙に父を喪ひ、ひとり母と居る。はじめ、山崎桃溪に従つて、句讀を受けしが、その後、常師なく、漢宋の學を合せて講究し、又堀川牛門の説を窺ひ、しかる後、井上金峨の折衷説に服して、其誨督を受く。北山家素より富饒、常に奇書を購求し、その學、大に進む。年二十二、孝經集説を著し、その名はじめて高し、故に金峨師を以て居らず、屢ば勸むるに人の門牆に立つべからざるを以てす。こゝに於て、自ら一格をなし、經説は孝經を以て根據となし、文は韓柳を以て歸宿となし、詩は宋の清新を尙ぶ。この時、藤園の餘派、なほ頗る盛なり、北山因つて作詩志毅、作文志毅の二書を著し、大に李王を排撃す。その學、博通精核、天文兵籍、五行小説より、醫卜道儒雜家技藝に至るまで、講究せざるはなく、四方の士、風を聞き、笈を負うて從

遊するもの、數百人。北山、名は幕府の士籍に在りと雖も、人と爲り、豪邁矯強、卑識に居るを耻ぢ、資錢を輸納して、終身職に就かず。寛政中、柴野栗山、幕府に召され、大に學制を變更し、程朱の學に非ざれば、悉く目して異端となす。北山、市川鶴鳴、豊島豊洲、家田大峯、龜田圃齋と五鬼の名あり、然れども、持説を變ぜず。文化九年歿す、年六十一。私に謚して述古先生といふ。北山、名望頗る隆、秋田侯、問ふに國事を以てし、北山亦た盡すところ、少からず。こゝに至り、侯の賻弔、禮に越えたりといふ。その著、凡そ三十餘種、學術淵源考、學派考、孝經樓漫筆等、最も觀るべし。子謙、字は公行、綠陰と號し、家學を受く。

北山、經學を講じて、發明自得の處に至るや、肩を揚げ、案を打つて曰く、漢唐守株の腐儒、宋明捕風の理學、ともに聖人の戸庭を窺ふこと能はず。况んや、その堂奥をや。余、その範圍を出て、別に得るところあるもの此の如し。此の如くして後に、眞に聖人の道といふべきなりと。然れども、彼は經世實用を主として、談理に拘々たらず。故に又曰く、大丈夫の學、宜しく經濟有用を以て本色とすべし。區々たる詩詞の如き、固より人と是非するに足らず。然れども、是れ亦た昇平の一雅具、斯文に與かるもの、その陵遲を見て、徒に黙して止むべからず。故に聊か志毅の作ありしのみと。而して、志毅の出づるや、詩文これが爲めに全く一變し、その効果の大、他の經義上の述作に過ぐること遠し。北山は



實にその崇奉せし袁中郎と一般、李王排撃の功、こゝにはじめて全く、市川寛齋大窪詩佛等、皆その門に出て、宋詩を唱へて、清新を勉む、而して、その變や、新に清詩を輸入せり、こゝに至りて、江村北海が、凡そ百五十年を後れ、百世と雖も知るべきなりといひしもの、愈よ中れるを覺ゆ、茶山、山陽より星巖に至るまで、皆然らざるはなし、而して、文は却つて三博士の手を待ち、亦た同一の傾向を表示し、清初名家を規撫するもの、その人、愈よ多く、詩人と同じく、文人なるもの、又別に學者以外に立てるあり、齋藤拙堂、野田笛浦、森田節齋の如き、皆然り、これ必ずしも分業の結果に非ずして、むしろ經術愈よ輕んぜられ、世を擧げて詞章を重んぜしが故ならむのみ。

太田錦城、名は元貞、字は公幹、一字は才佐、明和六年を以て、加賀大聖寺に生る。父玄覺、本草に精通し、醫を業とす。錦城幼にして穎悟、五歳はじめて字を識り、十一歳詩を作り、十三歳經史を講説し、郷里號して神童といふ。錦城夙に其兄伯恒に従つて、家學を修めしも、方技の人たるを甘んぜず、遂に四方に遊學するの志あり、この時、京都に皆川淇園あり、江戸に山本北山あり、ともに大儒と稱せらる。錦城先づ西遊して、淇園に學びしも、意に満たず、乃ち東行して北山に従學せしも、亦た此の如く、因つて慨然として、獨力之を古人に求む、人と爲り、志氣豪邁、肯て人に屈せず、故を以て權門貴族の知を得ること

少し、ひとり官醫多紀桂山、之を容る。桂山、博學洽聞、その名、關東に震ひ、且つ客を愛して、士に下り、一時知名の士、多く從遊す、桂山、錦城の才學を嘉し、子弟をして先づ業を受けしむ。錦城の家をなすに至りしもの、桂山の力、與つて其多きに居る。錦城、學問淵博、百家の書、讀まざるなく、就中經學に長じ、考據に密なり、元と宋學を尙ぶと雖も、その見の合はざるものは、辨難して餘力を残さず、竟に自ら一家を樹立するに至れり、はじめ、水戸侯、その奇才を聞いて、之を聘せむとせしが、沮むものありて果さず。吉田侯、之を招致して優待す。加賀侯、錦城が自國の産なるを以て、必ず之を致さむと欲し、屢ば吉田侯に請ふ。吉田侯、肯んぜずして、其祿を倍す、然れども、遂に峻拒すべからざるに至り、錦城に命じて加賀侯に事へしむ。錦城、亦た父母の國なるを以て、喜んで之に應じ、祿三百石を受け、上士に班し、職事に與らず。文政八年歿す、年六十一。六子あり、その三子晴軒、家學を受け、吉田侯に事ふ。錦城著述多く、九經談、疑問錄、仁說三書、梧窓漫筆等、最も觀るべし。

錦城容貌清癯、疎暢洞達、毫も城府を設けず、亦た矯飾を事とせず、しかも口辯ありて、講説流るゝが如く、又近く譬喩を取りて解説を爽快ならしめ、聽者をして爲に興起せしむ。彼の本領は、經世家たり、先覺者たるに在り。博學の資を以て、古今の治亂成敗を明かにし、歴々として、これを掌に指すが如く、しかも、本朝の事に至りては、尤も應仁、天正



以來の逸事に精しく、英雄割據の跡、その土地の廣狹大小、兵賦の強弱多少及び將士の姓名に至るまで、悉く之を請記して、麗々言を重ね、又郡國の利病に至りても其故を究めて、善く邊塞の事を談せしといふ。但し之を経學家としては、正に考證の一路に入り、その持説、聽くべきもの、太だ多からず。その著九經談は、一世を震撼せし大著にして、吳客江稼圃の如き、その長崎に来るや、この書及び多紀桂山の醫賸、村瀬之熙の藝苑日涉を求めて携へ、歸りしといふ。然れども、之を要するに、最近清人の餘唾を甜りしものにして、舶載本に乏しき當時に在りて、僅に珍と稱せられしのみ。たとへば、今日外國語に通ずるもの、往々にして、歐西大家の新説を摺撫し、自ら僭して創見となし、以て世を欺くの類。之を一概して、我が邦に於ける考證一派は、到底清人と其勝を争ふに足らざるを疑はず。

龜田鵬齋、名は長興、字は遲龍、文左衛門と稱す。幼名彌吉、その先は上野人、世農を業とす。その父安長、晩に薙髮して遁菴と號し、家を親族某に譲り、江戸に出て、馬喰町の瑠瑠工長門屋某の家を承け、寶曆二年十月を以て、鵬齋を生む。幼にして學を好み、六歳書を三井親和に學び、出藍の稱あり。一禪僧、之を奇とし、父に勸め、因つて井上金峨の塾へ送られて、折衷學を修む。才力群を抜き、弱冠にして、その名、一門に高し。金峨嗟稱して曰く、

渠牛後たるものに非ず、予亦た將に一頭地を避けむ。と年壯なるに及び、帷を駿河臺に下し、麾下の士、來つて贄を執るもの多く、相良侯の如き、その諮詢を容れて稗政を革むといふ。すてにして、白河樂翁の起つて執政たるや、鵬齋を以て、異學を唱ふるものとなし、其門に入るもの、仕官を止めしより、門人皆引き去る。これ鵬齋の鄰翁某、學術時勢を論ぜし書、誤つて鵬齋の代作と認められしに因る。鵬齋、こゝに於て、歎じて曰く、侯は君子なり、但だ學術の已に異なるを以て排斥して、摺棄す。門戸の弊、一にこゝに至るか、吾が事畢れり、と。時に尾張侯、師を求む。金峨、鵬齋に書を與へて、細井平洲の門に入り、因つて仕進を得せしめむと欲す。鵬齋、師恩を重んじ、固辭して従はず。尋いで、小石川諏訪町に徙る。天明三年、淺間山噴火し、關左大に饑ゆるや、比鄰の細民を救はむ爲に、自ら藏書を鬻いで、悉く之を賑し、遂に金杉村に移りて農を事とす。この時、家の窮乏甚しく、衣食日に給せず。熊本侯、之を聞いて、私に五人口を給して、其急を救ふ。中年以後、名望日に高く、書亦た佳境に入り、詩文及び書を乞ふもの、門に集まる。鵬齋之を拒まず、客來れば酒を置いて談笑し、遂に酒徒の名を馳す。すてにして、異學の禁、稍や弛み、世人その門に集まる。鵬齋固より人の門牆に立つを欲せず、直に鄒魯の源に溯らむとす。曰く、宋儒新説を創して、經義醇ならず、明清諸儒及び我が伊物諸氏、之を排すと雖も、未だ以て古道



の眞を得たりといふべからずと。こゝに於て、自ら奮ひ、諸典の深奥を究め、その師金峨の遺意を奉じて、折衷學を大成す。かつて曰く、吾力を竭して性命道德の義を究む、こゝに至つて止むべし。若し又一層深く入らば、恐らくは、天機を洩らさむと。その得意、想ふべし。又老莊を棄てず、聖經に乖くに似て、實は聖經を衛るとなす。平生、山本北山を友とし、善く、その學、稍や異なるに拘らず、遂に違言なく、北山歿後、その碑銘を作る。鵬齋文化九年三月を以て歿す。年七十五。今戸正福寺に葬る。葬を送るもの、金杉より今戸まで、絡繹踵を接せしといふ。著すところ、論語撮解、大學私衡、中庸辨義、老莊摺解、善身堂一家言、律數解、舊註蒙求、五穀稻梁辨、國字考、侯鯖一變、鵬躡居雜識、鵬齋詩抄、善身堂文集等あり。その義子綾瀬、亦た儒名あり。

その他、折衷派に屬するもの、其人なきに非ざれども、多くは言ふに足らず。而して、注意すべきは、その末流、考證學に入りしことなり。これより先、金峨の門、吉田篁墩あり、はじめ考證一派の學を安永天明の間に唱ふ。長崎の賈船、近世清人の書を傳ふるに及び、この學、益す滋蔓せり。蓋し、清代考證の學は、要するに、漢唐の註疏に本づき、その程度と範圍とを推擴せしものに外ならず。宋明を排すること甚しく、加ふるに、精密を以て其勝を擅にするものなり。時勢の遞降は、蕪雜なる折衷學を一變して、這般の態度を標

榜するに至らしめき。徳川氏季世の學問、盡くこの臭味を帯びたるもの、自ら其故なくむばあらず。皆川淇園、すてに名物に精しきを以て、京師に鳴り、村瀬栲亭、巖垣龍溪、亦た古註の大家と稱し、北山、鵬齋、又自ら出入先後するところあり。次に如上の諸人に就いて、略説するところあるべし。

皆川淇園、名は愿、字は伯恭、通稱文藏、京都の人、生れて穎異、四五歳、能く字を識る。その父成慶、試に杜甫の秋興八首を書して、之に授く。日ならずして、誦を成す。これより、讀書を課する、一過即ち記す。弟成章、亦た夙慧、父、二子の學を大成せしめむと欲し、經史百家の書、凡そ聞見に資し、學識を長ずべきもの、需むるに隨つて、これを給し、當時耆宿、以て啓發の益を得べきもの、交通往來せしむ。二子各所長を以て名をなし、成章は國史歌學の大家となり、淇園は儒名を負ふ。淇園長ずるに及び、恒に謂へらく、字義を知らざれば、文作るべからず、書解すべからずと。これより思を字書に潛む。而して、字書訓詁、往々假借、その眞を得ず、乃ち古人用文の例を類集し、又これを象形に取り、これを聲音に求め、乃ち名物の義の聲音に生ずるを悟る。曰く、名は聲に生じ、聲は物に生じ、物は天地陰陽四時の常あるものに生じ、道德を統べ、性理を貫き、聲氣に發し、民言に著はると。因つて易を以て其證となし、更に音記象式の法を定む。曰く、これを以て、名物の義を聞けば、精



微の極と雖も、亦た以て通曉するを得べし。字義すてに通ずれば、文理はじめて晰しかる後、古人の書を讀めば、明白日を掲ぐる如しと。こゝに於て、心を著述に潜め、或は義を思ふて得ざれば、終宵寐らず、乃ち開物の法に據り、これを六經語孟左國等の書に徴し、旁引曲證、以て審に孝悌忠信仁義道德の諸名物を釋し、名瞻六篇を作り、又字義を推して、文理を晰にし、章句を逐うて、篇次を釋し、述作の本旨を原づねて、易詩書儀禮戴記春秋語孟の釋解を作り、遂に以て一家の學を成す。淇園の學、一時大に行はれ、弟子門籍に登るもの、凡そ三千餘人。平日人を待つに、貴賤を視ること、一の如く、一室の内、迎へず、送らず、臺閣公卿及び諸侯、弟子の禮を執るもの衆く、平戸侯、最も敬重すといふ。寛政中、皇居造營の事あり、幕府乃ち柴野栗山をして、負文龜考を撰し、以て之を京都に致さしむ。五條公、由つて之を淇園に下問す、乃ち書中の誤謬を指摘して、上る。こゝに於て、二人往復辯論を重ねること數次、栗山遂に服す。文化二年、淇園宅を西鄰に買ひ、門人と謀つて、學堂を搦建せむとす。聞く者、悦んで捐財し、又その工を助け、年を経て竣功し、命じて、弘道館といふ。乃ち春秋に先聖を祀り、禮儀を講習す。學者こゝに於て、向ふところを知る。同四年五月、病んで歿す。年七十四。著すところ、上記諸書の外、文集、詩集、文訣、詩話等あり。子允、字は君猷、篋齋と號し、家學を承け、平戸侯に事ふ。

村瀬栲亭、名は之熙、字は君績、通稱は嘉右衛門、京都の人。幼にして穎特、詩を善くし、才思敏膽、長ずるに及び、武梅龍に従つて、管子を受け、物を處する精密、幹蠱の才あり。秋田侯の徵に應じ、その治所に赴く。侯、待つに賓師を以てし、國政を諮詢す。栲亭乃ち稍や更張をなし、紀綱頗る熙、國老及び衆士皆服す。晩に骸骨を乞ひ、京師に歸老す。享年七十餘。栲亭、博學洽聞、詩文を以て稱せられ、又書畫を善くす。讀書暇あれば、古法帖を臨模し、矻矻倦まず。尤も東坡を崇び、特に草書に、妙畫は蘭竹に長ず。著すところの藝苑日涉、世にその博雅を稱す。その他、論語集義、學庸集義、周易拾象稿、萬象一旨等なり。

巖垣龍溪、名は彦明、字は亮卿、三善氏、長門介と稱す。博士清原氏に學んで古學に通じ、後、大舍人に擢んでられ、篤厚謹信を以て稱せらる。寛永中年、七十餘にして卒す。著すところ、論語集說解、標記十八史略補正、松蘿館隨筆、同文集、龍溪見聞志等あり。

こゝに特記すべきは、折衷考證が、學問の衰微を促がせしこと、是れなり。二派の學、自ら公正の見地を以て立ち、他の諸學派を研覈するの道を開き、從來固陋なる門戶の見を破り、學術上に一新紀元を劃せしと雖も、固より、自己思索の體系を確立するを得ず。加ふるに、その取舍の際は、自己を没却せざるべからず、然らざるものは、眞の折衷に非ざればなり。かくの如くして、果して何物を折衷すべきかを知るに及ばず、その結果は、



聯絡なき綜合に陥り、論旨の模稜と立言の薄弱とは、遂に救ふべからず。兼山・金峨の輩、一時の英豪たりと雖も、之を仁齋徂徠に比すれば、氣局の大小、復然として異なり。折衷すてに然り。考證は、徒に博渉を勉めて、故事を知るのみ。兩者ともに學理の發展と相關せず。こゝに於てか、北山・錦城以後の學界は、沈靜に歸せざるを得ず。しかも是れ、覇府衰亡の兆、すでに顯はれし時にして、その間に有力なりし思想は、陽明學と水戸學とありしのみ。而して、氣運の政治上に實現せしものを、寛政異學の禁となす。その主とするところは、朱學の再興に在りと雖も、要は、自然の勢に外ならず。三博士と五異學の徒と、趨向固より同じからずと雖も、之を孰れにするも、早晚必ず避くべからざる終局の狀態は、即ち是のれみ。

## 第二十章 心學

覇府時代、四民の別を設くる、太だ嚴なほ、印度古代の族制の如く、劃然として混亂したることなし。三百年の文化は、主として、之を一概して、士人の間に行はれし觀ありと雖も、實は然らず。一般平民は、別に分れて特殊の人文を發達し、その末に於ては、決して

劣らざるものあり、しかも、今日その價值を論ずるもの少き所以、なほ往日尊卑の觀念を擺脫する能はざるに由るか。試に見よ、能樂謠曲は、室町の頃より續いて、公武の間に喝采を博せしが、之に對する淨瑠璃・操芝居は、町人の間に行はれ、殊に河東新内等、幾多俗曲の勃興に至りては、その盛、殆んど極まれり。之に次いで、狩野一流の唐畫・土佐の倭畫及び南宋の文人畫は、上流社會の鑑賞を得たるに對して、又平より以下、菱川・鳥居の浮世繪は、平民の愛玩するところとなれり。翻つて、文學に就いて之を謂ふも、三十一字の和歌は、依然として貴族文學たるの光榮を荷ふに對し、十七字の俳句は、平民文學として標置せられ、芭蕉・其角の尊崇されしことは、和歌三神も却つて及ばず。後には、猶ほ變じて、一層自由にして檢束なき川柳となり、最も汎く下層社會に流行したりき。夫れ諸般の學藝技術、皆雅俗官民の別を設くること、此の如く、教義亦た何を獨り然らざらむや。謂ゆる儒學は、王侯士人の學として、政治倫理の原則を探究するを以て其旨となせしに對し、こゝに俗流の中に興りて、實踐道德を鼓吹したるものあり、これを心學となす。

平民的道德教たる心學の勃興は、自然の趨勢なりと雖も、腐敗せる儒學の反動として、その流布、頗る目ざましきものありき。蓋し徠門の學、大に行はれしは、元祿奢靡の日



に於てし、その後、篤學慎行、節義を重んずるの士なく、社會は浮華輕薄の風に満ち、時運の轉變、這般教義の必要を感じしこと淺からず。然れども、又考ふるに、當時特に之を心學に求めし所以、社會教育未だ足らざるが故にして、彼等は、あるが上にも、卑近なるを望みしなり。試に當時平民教育の概況を述べむに、中には俊秀なるもの、稀に進んで、高尚なる學問を修めて、名を成すものあれども、それは全く例外にして、伊藤仁齋等、二三の人に於て、然るのみ。一般より言へば、數年間、謂ゆる寺小屋に學びて、能事畢れりとなす。この寺小屋は、一に手習師匠と呼び、主として習字を授け、讀書算數の一端を教ふるに過ぎず、その監理管督の不始末は、更にも言はず、教授法、又決して其當を得ず。その授くるところは、極めて卑淺にして、教科書と名づくべきものは、「國盡」消息往來「商買往來」の如きものを主とし、その、絶頂を極めしところ、僅に孝經、小學に及び、やがて全科卒業となれば、退いて毎日の業務に従事せざるべからず、之に加ふるに、當時の普通教育の上、に於て、大なる障礙を與へしは、町家の風にして、その貧富を問はず、苟くも男子にして、年の頃十歳にもならば、必ず年季奉公に出し、女子は専ら三絃踊等の遊藝を習はしむ。かくの如くなれば、往々中途にして寺小屋をも退かざるべからず。その後は、一生物價を記する外、筆を執ることなく、出納の帳簿を繕く外、書物らしきものを見ることなく

草雙紙、浮世本を讀むは、彼等の中にて、最も趣味を解するもの、事なり。今夫れ、普通教育の進まざるものは、精神的快樂を知らず、職工商賈の輩、家業の暇には、日待月待の淨瑠璃踊の寄せ會を催し、娘子供の藝能、衣裝の品評に餘念なきのみ。こゝに於てか、芝居操人形は盛に行はれ、鄭聲の淫に似たる豊後節は、一般に歡迎せられたり。且つや、昇平日すてに久しく、士民の遊惰と奢侈とは、年を逐うて愈よ甚しく、淳朴の風、全く棄てられ、人心輕薄に流れて、その底止するところを、知ず後に、寛政の時、白河樂翁の政務に參するや、主として節儉の令を下し、文武を獎勵せしこと、まことに其故なきに非ず。この間、唯一の教義として、人心に慰藉を與ふべき佛教も、強弩の餘勢、甚だ振はず。僧侶は、腐敗し、進んで弘教を勉むるものなく、信徒は、唯だ形式的に父祖の宗旨を奉守するのみ。法談念佛講の如き、多少益なきに非ざれども、固より少壯子弟の喜ぶところにあらず。かの豪宕不羈の奇僧志道軒が、豹變して後、始めしといふ軍談講釋は、よく彼等の耳に入りたるものなれども、見るべき結果なく、その目的は、全く娛樂に在りき。この時に方り、醇々として通俗を主とし、倫常を説くものあらば、その益するところ、固より鮮少ならず。要するに、心學教理は、幕府時代下層人民が唯一の「精神的糧食」たりしものなり。

心學創立の祖を、石田梅巖となす名は、興長、通稱は勘平、丹波桑田郡東縣村の人、貞亨



二年を以て生る人と爲り、方正にして才氣衆に超えたり、父を淨心といひ、善く之に教へたりといふ。梅巖年二十三、父母死して後、京都に出て、商家に事へ、暇あれば、神道を學ぶ、常に以爲へらく、神道は、我が邦先王之遺教にして、神典は、歴史なり、政令なり、願はくは、この貴ぶべく重んずべき國家特有の大道を、民衆に知らしめむと、仍つて、ひたすら研鑽し、孜孜として倦まず、然れども、その主に事ふるや、毫も商務を忽にせず、常に云ふ、若し我が説かむとする道を聽くものあらば、毎戸に就いて之に教へむ、今は唯だ閑なきのみと、又云へらく、われ聖賢の言行を規矩として、之を今日に勉め、吾亦た以て人の法則たらむと、三十五歳の頃より、了雲禪師を師として學び、刻苦精勵、大に工夫を凝らし、四十二三歳の時、主家を辭し、兼ねて諸家の講筵に侍し、神道を主とし、王陽明の説、老莊の學、さては佛教を參酌し、遂に自性見獨を發明して、一家の學を爲せり。こゝに於てか、知るべし、心學は、神儒佛老の四教を調和したる一種の道德教なるを、享保十四年、四十五歳の時、京都車屋通御池上る所、東側に住居し、はじめ、講席を開き、又諸方に招かれて、心學を説けり。その門に榜して云ふ、何月何日開講、錢入り不申候、無縁にても、御望の方は、無御遠慮、御通り御聞可被成候と、その聽衆の席は、男女の別を設け、女子の居るところには、隔ての簾を懸けたり。梅巖の著はすところ、都鄙問答、齊家論あり。甲は平生

門人の質疑に答へし語類を集めしものにして、元文四年、乙は延享元年を以て梓行せり。この年九月歿す、年六十。洛東鳥邊山に葬る、梅巖の篤實謹慎なるや、俗人を教化すること、頗る懇切にして、大に世の尊敬を得たり。因つて後世心學の祖として、崇められ、その學を爲すもの、皆石門と稱す。

梅巖の説に因れば、學問は自己の本心、即ち天命の性、換言すれば天地人三才の本體を知ることにして、之を領得して、身に行ふを徳といふ、彼が這般の原理は、之を王陽明と佛とに得たるものなり。性は神明仁慈、之を己の心に得たる時、父母には孝順を致し、他人には信實を盡すべし。そも天照大神は、神璽寶鏡寶劍三種の神器を以て其徳を顯し、畢竟天道その物に外ならず。故を以て、歴世この徳を離れず、臣下億兆、亦た之を體して行へば、倫常能く行はれ、家齊ひ、國治まるや必せり。彼は先天良心論者にして、兼ねて明晰なる國家至上主義を抱きしものなり。

梅巖の高弟に六角街の人、近江屋仁兵衛といふものあり、隱居して、全門といひ、師の後を嗣いで講説せしが、その徒、なほ多からず。その子堵菴に至りて、大に之を振興し、その學、はじめて盛なり。

堵菴は、京都富小路三條街の商估なり、はじめ源右衛門と稱せしが、隱居の後、嘉右衛



門と改む、名は信、一名は喬房、字は應元、平安東郭華頂山下に庵を結び、因つて東郭と號し、又堵菴と號す。後、居を朝倉街に移す。人と爲り、敦厚淳朴、少より梅巖に就いて心法を學び、その蘊奧を究め、師の没後、五樂舎を建て、講席となし、日夜之に臨んで教授す。家資饒豐、門徒行ふところの東脩、金錢財物の如きは却けて受けず、又門徒請ふことあれば、直に往いて講説し、専ら寛厚溫順の風を以て人を教化し、諄諄として數萬言を累ね、訓導倦むことなく、四方の民、喜んで教を受け、終に其學を海内に廣む。社約數條載せて史料叢書に在り、讀者就いて覽るべし。天明六年二月歿す、年六十九。著すところ、假名書きのもの、甚だ多く、皆通俗を主とせり。男兒女兒に示す前訓は、幼童に誨ふる小學にして、「我が杖」町人身ならしは、工商子弟が身を修め、家を保つての便となすべし。爲學玉帶「目の前」有べかゝり「朝倉新話」安樂問辨の如き、皆心の本體を説いて、私慾を去り、天理の自然に就かしめむとす、而して此等の書は、或は篤志の者に示すが爲に、自ら筆を執り、或は門人その講義を筆記せしものなり。堵菴、資性恭謙にして人に下り、且つ慈愛、善く衆を導きしを以て、海内その名を知らざるものなく、牧童樵夫に至るまで、翕然として歸向し、呼んで手島先生といひ、或は推尊して聖人と爲せり。かつて、大和に赴きしとき、途に竹輿を齎らし、強めて乘らしめ、平素教導の恩に酬むむといひしものあり。その歿す

るや、葬に會するもの、千を以て數へ、その居より、黒谷に至るまで、二十餘町、道路爲に狭く、近世稀に見るところなりきといふ。堵菴の子に上河正揚あり、洪水と號し、石門三世と稱し、父に繼いて教授せり。

これまでの心學は、主として京坂地方に行はれしが、關東に弘め、一層これを盛ならしめしは、堵菴の門人中澤道二の功に歸せざるべからず。これより先、女流に慈音尼菴、腹あれども、未だ汎く行はれず。道二、名は義通、俗稱を龜屋久兵衛といふ。京都上京新町の人、享保十年を以て生まる。その家、世々織絛を業とし、はじめ法華教を奉ぜり。かつて鬼子母神に詣て、香火を供するもの、市の如きを見て、心に謂へらく、神は金石の偶像に過ぎず、而かも禱つて應ずるあるは、豈に人心に得るところなからむや。と、家固より貧賤にして、讀書の餘暇なく、且つ文字に疎けれども、儒佛の教を喜び、寸隙を竊みて、講釋法談の席に迷り、又宿儒高僧に問ひ、稍や發明するところあり、たゞ妙法の二字に至りては、猶ほ疑團なき能はず、未だ自得するところあらざりき。一日早起、門を掃ふ、數僧相語つて過ぐるものあり、その何處に之くかを問へば、東嶺禪師の説法を聽かむが爲なりといふ。道二大に喜び、箒を投じて起ち、直に西山に抵る。聽衆すてに堂に盈つ。時は霜曉、寒威頗る劇、人皆畏懼の色あり。すてにして、禪師壇に登り、法を説き、未だ半ならず、



大喝して曰く、寒を畏るゝものは、須らく俗に歸るべし、禪を學ぶを爲すこと莫れ、盍んぞ各之を其心に求めざる。魚は水に在つて、水あるを知らず、人は妙法の裡に在つて、妙法を知らずと。道二瑟縮して、末席に在り、之を聴くに及び、豁然大悟して謂へらく、萬言の妙法、吾が心に外ならず、即身成佛、即ち是れなりと。時に年四十一。その後、石門の教を奉じ、手島堵菴に親炙し、遂に性理の蘊奥を究め、三教一致の旨を明にす。五十五歳剃髮し、はじめて道二と稱し、堵菴の許可を受け、江戸に來り、茅場町なる醫師前田一貫の宅に寓して、講席を開き、後、鹽町なる炭屋某の宅に寓し、毎夜開席して、心學道話を講説し、諸士大夫より庶民商工に至るまで、大に之を信じ、社友日に多く、月に盛なり。後、講堂を小川町に建てしが、寛政三年に至り、外神田相生町に參前舍を設立し、會日を定めて講談す。こゝに於て、道二の芳名、都下に普ねく、出藍の譽、愈よ高し。すてにして、京都に歸り、攝陽南紀に至り、兩丹播但の諸州に赴き、或は東海北國に往き、到る處道を説き、務めて俚解をなし、雜ゆるに滑稽諧謔を以てし、能く人をして感激して心服せしむ。三都とも、にその學館を開き、皆某某舍といひ、京都には、特に四五所を設く。享和三年、江戸の參前舍に歿す。年七十九。本所猿江妙壽寺に葬り、法號を貞徳院法玄道二居士といふ。道二の講話を筆記したるもの、道二翁道話六編あり、梓行して世に行ふ。門人植松自謙、繼いて

#### 參前舍に主たり。

道二の學は、梅巖、堵菴より出て、更に一步を進め、専ら心性の考察に入れり。以爲へらく、天地萬物は、皆同根同性、各自の心、亦た無我平等にして、その形態は、各相異なるも、その本質に至つては、固より高下の別なし。故に、人は、その形態に順應して、和合を保續せざるべからず、これ即ち善なりと。こゝに於てか、その説、愈よ陸王に近く、更に又、張橫渠に似たるところあり。但し、謂ゆる差別は、行爲上に存し、心靈に至りては、無差別なり、かくの如くして、宗教的分子を含有し、自然主義に趨向するに至れりき。

心學の大家は、石田手島、中澤の三子に過ぎず。梅巖、之を創始し、堵菴、之を大成し、道二、之を弘布せしめたり。その外、石門の流を汲みて、道話をなすもの、數へ來れば少からず。その中、最も名あるもの、二三を擧ぐれば、松翁、鳩翁の二人あり。松翁、通稱は布施伴右衛門、名を矩道といふ。京都松原の邊に住居し、學を堵菴に受け、後、徒を聚めて講筵を開く。著すところ、松翁道話あり。鳩翁、通稱は柴田謙藏、名は亨、字は陽方、薩埵德軒に従つて學び、中年明を失したる後、専ら諸方に遊歴して、心學道話をなす。謂ゆる目に盲して、心に盲せざるもの、名望頗る隆、諸侯之を招き、賤民之を慕ふ。天保十年歿す。男武修、その講話を筆記し、題して鳩翁道話といふ。二人の外、著書を以て知られしもの、奥田壽太あり、名



は在中、頼杖と號す。安藝の人、堵菴の子洪水に親炙し、天保十年、江戸に來り、參前舎に開講す。著すところ、心學道の話あり。

凡そ心學者の講說方法は、自ら一定の典型あり、はじめに古經中の一兩句を引き來り、敷衍擴張、例を引き、證を連ね、滔々數萬言、堅論横說、控送自在、或は諧謔を交へ、人をしりて聞いて笑ひ、笑つて掌を拍ち、毫も倦厭の念を生ぜしめず、矍々然として、知らず識らず、其道に入り、遂に正に復歸せしむ。之を高言莊語せずして、溫說篤論し、理に照すよりも情に訴へ、欣然領得せしむるを以て、特色となす。唯だ末流の輩、或は之を以て媚を凡衆に求め、軍談講釋と相去ること遠からず、遂に衰運に臨むの止むを得ざるに至れり。然れども是れ、其人を得ざるが故にして、決して其學の罪に非ず、之を以て誚譏するは固より非なり。

心學の下層社會に於けるや、その効果、固より大にして、且つ實例に乏しからず。今試に二三を擧げむか。近世畸人傳、堵菴を傳するの條に曰く、或る婢女、郷里に祖母一人あり、貧にして親族の養を受く。知るもの、勸めて、その身得るところの金を分ちて、養を助けよといふに、婢聽かずして曰く、吾が身、親族の手を借らず、自ら衣食するは、猶ほ父母の幸なり、その上に、何の奉養をかいはむと。然るに、いつの頃よりか、その仕ふるところ

の家婦に従つて、堵菴の講を聞きしより、前の言を悔みて、數ば祖母に物を贈り、孝の心をはこびしとなり。又或る女、鼠の爲に衣裳を嚙まれて、はらたち悲みしが、かねて彼の心法を聞きしは、こゝぞと思ひて、一夜靜坐して省るところあり、自ら悦んで、口ずさむ。「げふまでは、鼠か喰ふたと、おもひしに、わたしが喰たと、おもやをかしい」といへり。凡そ教示の旨、自らを抑へて他を惠み、庶人の分を守りて希望を絶つべし、儉を務めて吝なることなかれとなり」と。橘南谿の北窓瑣談にも、之を記して、下の言あるを見る。曰く、婦人小兒などの耳にも入り易く、説き聞かせて、孝悌忠信の事より、家事商買家産儉約農業耕作の事に至るまで、手近く教ゆる故に、是にて、中惡き家内も、此講を聞きしより、家屬むつましくなり、わんぱくなりし小兒も、父母を尊敬することを知りて、手習を精出すやうになり、酒興に耽りし手代も、俄に篤實謹厚の行になりしこと、余常に甚だ多く聞き及べり。但だその高弟に教ゆるには、禪學の頓悟に似たることありて、少し奇癖の筋にも入るにや。只だ一通りの講釋は、平穩正當にて、大に世教を助け、人間に益ある學なりと。隈山谷將軍のものし玉へる内部文明論序中の語、又偶ま此に及ぶものあり。曰く、余かつて笈を負うて江都に遊び、一日兩三友と醉に乘じて、麴街を歩し、心學道話の標牌を見る、乃ち笑つて曰く、咄、何者の猾奴、敢て愚人を瞞せむと欲するか、試に聽いて、



以て一場の笑に抵らむと。遂に相率ゐて入り、跌坐目を張り、傍に人なきが若し、すでにして、講師壇に上り、先づ孝經の一章を講じ、繼いで、之を證するに忠孝節義の事を以てし、丁寧反覆、交ふるに談諧を以てし、而かも、論理秩然、盡く正道に歸す、粗暴余の如きものと雖も、刻心銘骨、酒氣頓に醒め、同行皆泣く、と。因に言ふ、内部文明論は、川尻寶岑の著すところ、寶岑は、現存せる心學者中の翹楚といふ。但し今講席を開かず、他の諸舎、十數年前、なほ京都に存するものありしと雖も、今やその存否を知らず。

## 第二十一章 二宮尊徳

尊徳翁の事、小學修身書類に散見し、五尺の童子、なほ之を識る、彼は徳行の君子たると同時に、功利主義の上に立ち、經濟道德の關係を明かにせし、穩健偉大なる平民教の開祖として、不朽の榮譽を値するものなり。

尊徳、通稱は金次郎、相模足柄上郡柏山村の人、父は利右衛門、母は川窪氏の女、天明七年を以て生る、五歳の時、酒匂川洪水あり、損害數十村に及び、其家の田畝、害を蒙ること、最も甚しく、家産殆んど蕩盡す。利右衛門、夙に興き、夜に寢ね、その回復に従事せしが、不

幸にして、病に罹り、荏苒數周星、尊徳十四歳の時に没し、後二年、母も亦た逝く、この歳六月、酒匂川再び洪水あり、田畝盡く流亡す。こゝに於て、尊徳、二弟を母の生家に托し、自ら伯父萬兵衛の家に寄食し、日夜農を務め、且つ幼にして貧困に陥れるを以て、深く感ずるところあり、慨然として謂へらく、天下憐れむべきものは、唯だ貧困のみ、吾若し家を興すを得ば、博く貧民を救助する法を講ぜむ、と。因つて、天地神明に誓ひ、須臾も忘るゝことなし。幼時山に樵し、その途次、大學の書を懷にして、之を読み、往々にして、高聲人を驚かす、或は目して狂兒となす者あり。又十四歳の時、隣村の觀音堂に養し、堂下に坐して深く念ふところあり、忽然として、一行脚僧來り、堂前に踞して經を誦す、その聲微妙、その經、深理廣大、一聞了然として、意中歡喜に堪へず。誦經、すでに畢る。尊徳謹んで僧に問うて曰く、今誦するところは、何の經ぞ、僧曰く、觀音經なり。曰く、予、かつて屢ば之を聴く、而して、今聞くところに異なり、何ぞ余が心に徹することの明かなるや、應へて曰く、世の誦するところは、吳音なり、今國音を以て轉讀せり、是れ子の解する所以か、と。尊徳懷中を探り、錢二百を奉じて曰く、願はくは、寸志を呈せむ、再び誦讀せよ、と。僧、其志を感じ、轉讀前の如く、讀み畢つて、之くところを知らず。尊徳胸中豁然として、大に喜び、柏山村の善榮寺に至り、和尚に謁して曰く、大なるかな、觀音經の功德、その理、廣大無量、そ



の意云々と之を説解すること、流水の如し。和尚大に驚いて、曰く予、すでに耳順を超えたり、多年この經を誦すること、幾百千遍、未だその深理を解する能はず、今予少年、一たび讀誦を聽いて、無量の深理を明解す、嗚呼是れ菩薩の再來か。今野僧この寺を退くべし、願はくは僧となり、衆生の爲に此寺に住し、大に濟度の道を行へ、と尊徳固辭して曰く、これ予の望むところに非ず、予、祖先の家を起し、その靈を安んぜむとす、志ざすとこゝろ、出家に在らずと、これより後、佛意も亦た諸人を濟ふの功大なるを知れりといふ。

尊徳の萬兵衛に寓するや、河邊の磧地を視、油菜を種ゑて、實若干を得たり、乃ち之を市場に鬻いて、膏油に換へ、晝は業を務め、夜は細を紉ひ、鞋を造り、夜半人寝ぬるに至れば、書を讀み、算術を學ぶ。萬兵衛、窃に之を窺ひ知り、叱責して曰く、汝之を學びて、何の用をかなす、且つ夜寝ねざれば、明日身體疲勞し、必ず業を懈るに至らむと、尊徳憮然として自失し、謝して之を止め、その後、暇あれば、一意鞋を造り、之を錢に換へて、貧民に惠與す。五六月の交、庭外不種の地を耕し、棄苗を拾うて、之を播き、糠耘培養して、稔一苞餘を得たり、尊徳以爲へらく、これ天の賜なり、凡そ物を積み、大を致すは、必然の理なり、故に致々として懈らざれば、庶幾くは、以て家を興すの資と爲すべしと、これ他日報徳方法の由つて起りし所以なり。

明年春、萬兵衛の家を辭して、小田原に至り、士人服部氏の家三男ありて、皆讀書を好むを聞き、請うて、その家僕となり、夜は其側に侍坐し、傍聽して倦まず、遂に四書に通じて、之を請記せり。又請うて三子通學の僕となり、學校に至る毎に、講堂の窓下に立ち、竊に講義を聽いて、略ぼ文義に通ずるを得たり。その後、服部氏を辭して家に歸り、専ら産業に従事し、家を興すに汲々たり、且つ務めて、貧民を救助す。未だ幾ならずして、服部氏、禍患交も至り、家道甚だ艱く、而かも、之を整理する能はず、乃ち尊徳を請ふ。こゝに於て、復た服部氏に至り、日夜拮据すること、前年の如く、數歳を経て、盡く債を償ひ、更に餘財を生ずるに至れり。尊徳、又數ば藩の重臣に就き、本藩領收升を改正せむを請ひ、その事行はれ、領民大に悦ぶ。すてにして、服部氏を辭し、自ら其家を回復せむとし、致々汲々、遂に初志を達するを得たり。文化元年、藩主金帛を賜うて之を褒す。

これより先、小田原侯の分家宇津氏の采地、下野芳賀郡物井村に在り、土地瘠薄、之に加ふるに、天明の飢饉に遇ひ、戸口減少して、田畝荒廢し、年貢も亦た随つて減却せり。本藩之を憂ひ、屢ば金を出して、之を救へども、及ばず。こゝに於て、侯、尊徳を擧げ、之に委するに、分家興復の事を以てす。尊徳再三固辭し、然る後、命を奉ず。文政四年、その地に至るや、建議して曰く、荒を開き、發を興すや、固より易からず、若し必ず之を爲さむと欲せば、



皇國開闢の大道に山らざるべからず。從來常に賜金あり、故を以て、人皆心を奪はれ、詐欺百出、却つて弊あり。願るに、鴻荒の世、開闢の時、金を海外に借るの事なし、故に皇國は皇國の力を以て國を治むべし、かくの如くして、功の成らざる、臣之を信ずる能はずと、侯大に喜び、文政五年、尊徳を擢んで、藩士となし、托するに、興復の事を以てし、十年間、その爲すに任かす。こゝに於て、尊徳盡く田宅を鬻ぎ、奮然志を決して、再び故郷に還らず、家族を携へて、物井村に移居せり、時に文政六年なり。

これより、尊徳は、その自得に係る開拓法を實施し、舉直獎勵法、無利子金、旋回貸附法、報徳日課全法等を行ひ、大に徳化を敷き、數年ならずして、功績大に擧がり、名聲四方に噪しく、鳥山侯、谷田部侯等、競うて、之に托し、皆効果あり。天保十三年、幕府に擢用せられ、普請役の格に班し、印幡沼開墾の事を命ぜらる。尊徳、乃ち意見書二卷を呈せしが、議論常に異なるを以て、用ひられず。弘化元年、日光神領荒蕪開拓調査方を命ぜらる。これより先、中村侯相馬氏、藩士數人を擇び、尊徳に就いて教を受けしめ、尊徳因つて爲政鑑三卷を著はす。蓋し當時の諸侯、往々之を行ふものあれども、その之を信ずる厚うして、その功大なる相馬領を第一となす。尊徳、日光に至り、實地を検し、富國方法書六十卷を著して、之を上る。嘉永七年、日光神領九十村荒蕪開拓の命を受くるや、今市驛の官舎に移

り、日光奉行に屬して、其法を施行す。不幸にして、疾に罹り、安政三年歿す。年七十一。

尊徳は、近世稀に見るの偉人にして、その學、全く自得に係る。蓋し天稟の才なり。その説、經濟道德の關係を主とし、精緻なる數理的統計を以て證となすが故に、基礎頗る固く、小にしては家を齊ふべく、大にして國を治むべし。その學の精神、道德經濟の必然的關係を認めしは、管仲等、法家に類し、その天命を重んぜしは、墨子に近く、しかも寛厚、徳化を重んずるの風、最も稱すべし。後世その學を稱して、報徳學といふ。報徳外記、報徳第二十五に曰く、我が道德に報ずるに在り、何をか徳に報ずといふ、三才の徳に報ずるなり。何をか三才の徳に報ずといふ、日月運行、四時循環、萬物を生滅して、息むなきものは、天の徳なり、草木百穀生じ、禽獸魚鼈殖し、人をして生を養はしむるものは、地の徳なり、神聖人道を設け、王侯天下を治め、大夫士邦家を衛り、農は稼穡を勤め、工は宮堂を造り、商は有無を通じ、以て人生を安んずるは人の徳なり、嗚呼三才の徳亦た大ならずや。夫れ人の世に在るや、三才の徳に頼らざるものなし、故に我が道、その徳に報ずるを以て本となすなり。上は王侯より、下は庶人に至るまで、各天分により、節度を立て、儉勤を守り、而して、分外の財を讓つて、報徳の資となし、以て負債を償ひ、以て貧窮を恤み、以て衰邑を擧げ、以て廢國を起す。その之を施すや、一家より二家に及び、一邑より二邑に及び、



漸次郡國天下に及び、遂に海外萬國に推及す、これ天地人三才の大徳に報ゆる所以なり、と之を要するに、彼の學説は、なほ多少の改良を得て、大に世に行はるべかりしが、その不幸にして、然らざりしは、時、恰も幕末に近く、社會上、這般の根本的革新に暇あらざりしに因る。但だ、その精神は、萬古に亘りて、決して泯滅せず、今日なほ多數の歸嚮者を有するを見るも、その切實なること、容易に推知すべきなり。

報徳學に關する書籍極めて多し。上に述べし爲政鑑、富國方法書は、今觀るべからずと雖も、門人富山高慶、報徳記八卷、報徳論一卷あり、福住正兄、二宮翁夜話五卷、報徳學内記一卷、二宮尊徳翁略傳あり、齋藤高行、報徳外記二卷、二宮先生語類四卷あり、報徳記、最も汎く世に行はる。然れども、誤謬少からず、報徳外記及び語類の二書は、日本倫理彙編中に收む。篤學の士は、就いて觀るべし。なほ寫本にして存するもの頗る多く、幸田露伴氏の調査に依れば、二宮先生御説得聞書略、天徳無盡現量鏡、相州大住郡伊勢原村宗兵衛狀、二宮先生文纂、觀通悟道傳、成田村小源治に遺はされたる書、報徳教訓、相州曾比村頂戴金請書寫、福住佐兵衛宅に於て御話の記、報徳寄せ書拾ヶ條、宮原治兵衛等に遺はされ候書、曾比村索繩御趣法帳跋、窪田先生御説經聞書、二宮先生御歌集、利根川分水堀割御普請見込帳等、凡そ十數種ありといふ。

## 第二十二章 寛政異學の禁と三博士

木下順菴の東下に次いで、曠世の逸才物徂徠を出したる江戸は、幕府の中葉百年間、殆んど海内文物の中心たるの觀あり。京洛の儒は、仁齋、東涯より以下、寥々殆んど聞くなしと雖も、實は勢力蓄積の時期にして、寛政に至るや、三博士を出して、學政の改革をなさしめ、その後、關左、殆んど儒を出さず。循環の理、史上に觀るところ、常に此の如し。然り、關西に於ける、隱然たる實力の存在は、その往々にして、時尚の先たるの、一事に就いて、之を知るべし。竹内式部が公家と糾合して、變を實曆に企てしは、山縣大貳、王政を夢想して、禍を明和に取りし先聲なり。折衷の學、井上金峨、片山兼山に始まると雖も、木門の神原篁洲が紀藩に教授し、訓詁は馬郷に取り、義理は程朱に取りしは、はるかに其前に在り。考證の學、錦城に至りて、大に稱せらるると雖も、良野華陰が百家に出入したると、皆川淇園が獨造深詣とに比して、後ること甚し。龍草廬の書畫會、亦た江戸に盛に、江村北海の日本詩選、池桐孫五山堂詩話の藍本たり。その善といはず、惡といはず、西之が始をなし、東之を承くるは、幕府時代の常にして、江戸の京都に於けるや、到底歴史的感化



の一點に於て相及ばざるを示すものなり。一は澁水池をなすが如く、一は深山巖罅の泉、たとひ枯旱に遇ふも、滴瀝なほ絶えざるが如し。而して、浪華文物の興起は、關西文化中心點の遷徙を意味するものにして、その勢の尙ほ新なるを見るべきなり。

浪華の文學は、五井持軒を以て唱首となす。時を以てすれば、仁齋益軒と相若く、而して、懷德書院、享保に建ち、三宅石菴、中井齋菴、持軒の子蘭洲、相踵いて教授す。木門の人あり、物氏の徒あり、極めて多様なり。その地は、東西交渉の要津に當り、四方財貨の集散するところにして、豪商大賈、坐して貨權を握る。たとへば、戰國時代に於ける堺の商賈が、武門以外の一大勢力たりしが如し。こゝに於て、富力を恃み、文藝を事とするもの、少からず。山片蟠桃が獨創の學を立てしも、この地なり。近代雜學者の泰斗たる木巽齋の出てしも、この地なり。その鬱積の久しき、遂に三博士を養成せり。三博士とは、柴野栗山、尾藤二洲、古賀精里の三人にして、その片、山北海の混沌社に在るや、諸子と交遊し、遂に異學禁制の舉を東都に成すに至りしなりき。

こゝに、三博士及び其與たりし諸人の略傳を述ぶるに先ち、謂ゆる異學の禁の何者たるかに就いて記するところなからず。白河樂翁の執政たるや、寛政二年六月、異學を禁ずべきことを時の學務總官たる林家に告諭す。その文に曰く、朱學の儀、慶長

以來、御代々の御供用之事にて、既に其方家各學風維持之事被仰付置儀候得者、無油斷正學相勵み、門人共取立て可申儀に候。然所近頃世上種々新規之説を爲し、異學流行風俗を破候類有之、全く衰微の故に候哉、甚不相濟事にて、其方門人共の内にも右體之學術純正ならざるも、折節は有之様に相聞え、如何に候。此度聖堂御取締嚴重に被仰付、柴野彦助、岡田清助儀も右様被仰付候得ば、能く此旨申談、急度門人共異學相禁之不限、自門他門申合、正學講究致し、人材取立候様相心得可申候と。こゝに於て、林家も亦た同一の旨趣を以て、諸生に示諭せり。如上異學の禁は、實に三博士及びその同臭味たる西山拙齋、賴春水、中井竹山兄弟の熱心なる運動によりて、爲政者の心を動かせし結果にして、彼等學者に在りては、單に自己專攻の學派を普及するの念慮に過ぎざりしと雖も、その政治的意義は、實に非常なりき。その第一幕府は、羅山以後、朱子學を以て正學となし、その秩序を貴ぶ學風を重んぜしが故に、その廢弛の時に當りては、必然的に之を刷新せざるべからず。第二、當時麾下の風儀、殊に墮落を極めしに因り、苟くも幕府を維持せむと欲せば、實學を獎勵する必要あり。第三、諸種學派の簇生は、多く檢束を加へざるより起り、その弊、次第に甚しく、國民思想統一するところなく、浮浪の輩、時に之を藉りて、陰密に國事犯的行動を爲すが故に、是非とも標準たる國教を樹立せざるべからず。



かくて幕府は、因襲的に朱學を以て正學となし、その中に、尊王賤霸の極めて危険なる分子を含有するを顧慮するに暇あらず、遂に此令の發布を促成するに至れり。勿論、その結果として、自由思想を拘縛したりしが、それは一半時勢の所爲なるを忘るべからず。但だ一時學政を振張し、教育の面目を一新し、暗々裡に聖代文化の先驅となりし功は、又斷じて没すべからざるなり。

柴野栗山、名は邦彦、通稱は彦輔、讃岐高松の人。はじめ浪華の後藤芝山に學び、後東遊して業を林家に承く。英邁不群、經籍に耽思し、傍詩文を善くす。學成つて後、阿波侯に事へ、儒員となり、祿四百石を食み、京都に住して、朱學を唱ふ。西依成齋、赤松滄洲、皆川淇園と相善し。天明八年、五十三にして、幕府に召され、江都に來りて、昌平黌の教官となり、學政を定む。後、布衣班に進み、公子に侍讀し、大議ある毎に、謀詢少からず。文化四年歿す。年七十四。平生書を著すを欲せず、かつて頼春水に謂つて曰く、書を著すは、人を益せむが爲なり。余の如き迂腐の儒、不急の書を作るは、人の心目を損するなり。故に余は書を著さず。これ人を益する所以。然らば、之を著書ありといふ、亦た可なり。と。故に栗山文集の外、著すところ、多からずといふ。

尾藤二洲、名は孝壁、字は志尹、通稱良佐、伊豫川江村の人。父、操舟を業とす。二洲幼にし

て足疾あり、大阪に來り、學を片山北海に受け、復古學を講習す。この時、安藝の人頼春水、亦た社友たり、洛閩の書を得て、之を読み、二洲に勸めて、之を讀ましむ。二洲甚だ悦び、以て正學となす。寛政中、召されて昌平黌の教官となり、俸二百石を給し、その足疾あるを以て、特に官舎を發内に賜ひ、後、壹岐坂の第に就いて老を養はしむ。二洲人と爲り、恬淡簡易、文は歸震川を愛し、詩は陶柳を喜ぶ。文化十年歿す。

栗山の政治家に傾き、精里の文士に近きに對して、二洲は全く學者的なりき。故に其學を標章する上に於て、最も力を致し、その異學を排撃するや、殆んど餘力を剩さず。正學指掌の附録に於て、先づ仁齋を論じて曰く、古義學といふは、伊藤仁齋より起れり。仁齋も初は程朱の書を読みたれども、得る所なくしてありしが、一朝偶然と、天地は一元氣のみと心付き、さては此氣の外に物なく、道といふも此氣也。天地といふも此氣也。と目覺めたる心地して、手の舞ひ足の蹈むをも忘れ、我こそ道を知りたれ、郷魯の血脉を得たれとて、高く自ら標持し、新に一派を造爲せる者也。たとへば、暗室の中にありて、天地日月を見ざりし者が、偶々戶外に出で、之を見て、大に驚き喜びて、我こそ天地を見たり、月日を知りたれとて、聲高に叫び喚くが如し。他人より見れば、甚だ笑しきことならずや。彼が所謂天地は活物なり、萬物は一元氣などいへることは、理氣の説に達せる者



の皆知りたることあるを、唯だ己のみ知れりと思ひしは、その舊見の死見なりしを知らねばなり、且つ偶ま心づきしまゝにて、深く思を致さずして、氣のみにて理なしなど敢言し、遂に一門戸を立てしは、誠に疎淺なる氣象といふべし、と。又徂徠學を論じて曰く、古文辭學は、物徂徠より起り、余初年學びたる故に、能く其意を知れり、其學の主とする所は、功利に在りて、聖人の言を假り飾るまでなり、道は先生の作り玉へる者にて、自然の理に非ず、安天下の具にて、當行の路に非ずといふこと、其綱要の處にて、皆功利に本づきたり、畢竟は道といふも、聖人の天下を理め玉へる法を今に傳へたるにて、今時の掟の如きものなり、六經といふも、御成敗式目の如き者なりといへるなり、此起りは、かの老平生功利をのみ心懸けしより、何を見ても其姿に思ひなし居たる處に、仁齋の説を聞き、略ぼ其意に當る所あるを悦びて、又面を換へ、頭を改めて、即ち建立し出せるなり、荀卿奇を好みて、思孟諸賢を謗り、其門人李斯、遂に聖人の書を焚けるが如し、異を好むの弊、懼るべきに非ずや、と。次に陽明學を論じて曰く、本心を知るといふ一派あり、是は禪家の餘習と見えたり、是れ氣を謬つて理とし、道は人の理なることを知らぬより起りたる者なり、其徒皆此心の靈活よく知覺する所あるを見て、珍重すべきことと思ひ、それを主として、人をも教へ、口に任かせて、廓然大公など、説き出し、人を空虚に

迷はしむ、其害も亦た淺からず、世の志ありて所見なきもの、多く陥らる、彼れ性命道德の説をいひ種々高妙の談をすれども、畢竟心の靈活知覺を識りたるまでにて、眞に性命道德の義を知れるに非ず、本來道は理なることを知らぬ故、理學に従事せず、理學に従事せぬ故、道心人心の分を辨へず、たゞ其心より作爲なしに出づれば、それを道とも理ともいひて、猖狂妄行す、嗚呼、聖人の門、何ぞかゝる率易無稽の説あらむや、志あらむものは、必ず本心等の説を聽くべからず、と。これ羅整菴、陳清瀾等の所説に依傍したるものにして、その學に忠なるは、固より稱すべきも、議論の性質上、やゝ固僻に失したるの嫌なしとせず。

古賀精里、名は樸、字は淳風、彌助と稱し、世、佐賀藩に仕ふ、少にして學を好み、日夕勉磨し、長じて王陽明の説を喜び、京師に遊ぶ、はじめ福井小車に従ひ、後、西依成齋の門に入り、尋いで大阪に寓し、二洲春水と交り、朱學を奉ず、その國に還るや、擧げられて、機密に參預し、建設するところ少からず、後故ありて、職を辭し、専ら教授を掌る、寛政三年、侯に従つて江戸に来るや、幕府命じて、經を昌平叢に講せしむ、藩臣の叢に入りて、經を講ずる、精里より始まる、人皆以て榮となす、七年、擢んでられて、幕府の儒員となり、栗山、二洲等と學政を革む、すてにして、昌平叢の教官となり、文化八年、林祭酒とともに、對馬に赴



き、韓使に接見す。晩年齒徳ともに高く、海内推して山斗となし、列侯贊を執るもの少からず。精里人と爲り、軀幹豊偉、嚴密寡黙、人不善あれば直面之を戒む、而かも退いて後言なし。深く性理を崇尚すれども、崎門固陋の弊を惡む、その學該博、發して詩文となる、文は周秦を祖述し、材を兩漢六朝に取る、故に其作峻潔にして、卓然家をなす。詩は李杜を宗とし、その味雋永、然れども、晩に及びては、晚唐宋初の格調を放出せり。又書法を善くす。文化十四年歿す、年六十八。文集、初稿より三稿に至る、その他、撰著少しとせず。子三人あり、次子侗菴、最も才學あり、昌平畿の教官となり、海防臆測等の著を以て、その名、一世に高し。

はじめ三博士の異學の禁を布くや、栗山最も此舉に銳意し、謗讟四に起るを避けず、五異學の徒、亦た敢て屈せず。關西に於ては、栗山の友赤松滄洲、大にその不可を論ぜし、も終始之を贊助して、大業を成さしめしもの、頼春水西山拙齋及び中井竹山履軒兄弟あり。左に併せて、略叙するところあるべし。

頼春水は、安藝の人、名は惟完、字は伯栗、一字は千秋、通稱彌太郎、その人は備後三原の人、後安藝竹原に移り、世耕耨を業となす。春水、生れて數歲、好んで筆研を弄す、父母相賀し、之をして儒たらしめむと欲し、郷醫に就いて、句讀を受けしめ、その學、漸く進む。年十

九、疾あり、醫を上國に求めて、塚に至るや、趙陶齋に逢ひ、奇として教へられ、後師友を大阪に求めて、伏見港に寓し、明年居を新天満港に移し、尋いで江戸港に移し、はじめて、徒に授けて生を爲す。春水、はじめ詩を以て著はれ、又筆札敏妙を以て、名四方に噪ぐ。すてにして、洛陽の書を讀んで、心に會するあり、尾藤二洲が片山北海の門に在るを誘うて、同じく學び、相發明するところ多く、又古賀精里を得、こゝに於て、奮然志を立て、その故と習ふところを棄て、日々仁義道德の要を講究し、又中井竹山兄弟、西山拙齋、菅茶山等と道誼の交を爲し、毎々相切劘し、名聲日に起る。本藩安藝侯、命を傳へ、擢んで、儒員となし、累進して、食祿三百石に至り、江戸の藩邸に來つて、世子に伴讀すること凡そ十一年。小學より、孝經論語に及び、頗る意を進説に致し、物に觸れ、約を納れ、民艱を知り、君徳を養はしむ。後に世子封を襲ぎ、仁にして善く、斷じ、内外欣戴せしは、蓋し春水輔導の力なりといふ。弟杏坪、亦た擢んでられて、儒員となり、春水と同じく、學政を理し、闔境翕然として、風に嚮ひ、經史文章、その人に乏しからず、教導の盛、これより前、未だ有らず。又命を蒙り、杏坪とともに、藝備孝義傳を編輯して成る。幕府又命を傳へて、書を昌平畿に説かしむ。その他、侯伯貴人、詞翰を請求するもの、晩にして愈よ多し。文化十三年、病を以て逝く、歲七十一。三男一女あり、長は山陽、二男皆夭す、弟春風の子元鼎を養うて、嗣となす。



又先つて歿し、遺腹の子あるも猶ほ孩、山陽の子元協、成童、嫡孫を以て祖を承く。春水、かつて白河侯を送る文あり、學統辨等と併觀して、其學の一斑を知るべし。

西山拙齋、名は正、字は士雅、備中鴨方の人。幼にして穎悟、父恕玄に従つて、詩書を受け、數過誦を成し、日々演史を讀み、以て戲弄に當つ。父、その此を以て病を致さむことを恐れ、時に或は其卷を奪へば、父の外出を伺うて、復た讀む。十六歳、笈を負うて、大阪に遊び、醫を古林某に學び、儒を播摩の岡孚齋に受く。孚齋老ひ、外孫那波魯堂をして代り授けしむ。二十歳、京師に遊び、刻苦儒を學び、僧六如等と盟を結んで、詩窮社と稱し、又和歌を紀美鎮及び僧澄月に學び、入阿、大愚、二師の輩と遊び、名、京坂の間に噪ぐ。はじめ、魯堂、護國の學を信ぜしが、後頗る其語に矛盾多く、文字亦た敗闕多きを覺り、幡然として、猛省し、更に程朱の書を取つて、從容潛翫、心に會するあり、朝鮮の使來聘するや、その參佐綱紀、學識あるものを選ぶを聞き、請うて、接伴使に従ひ、ともに俱に東行し、乃ち學士南玉、書記元重舉等と疑難討論し、益す宋學の是にして時學の非なるを知り、遂に書を拙齋に寄せて、舊學を捐てしめ、且つ南玉輩を見むことを勸む。拙齋、乃ち復た大坂に往き、魯堂に従つて、諸客に客館稠人中に會し、座す、てに定まるや、重舉に問ふに、持敬の工夫を以てし、その答ふるところを觀る。この時護國の學、盛に行はれ、聘使經るところ、西は筑

前より、東は江戸に至るまで、往來六百里に垂んとし、其間接見するところ、率ね數百人に下らず、譯話筆語、李王の古文辭に非ざれば、訓話記誦、未だ嘗て一言修省の事に及ぶものを見ず。こゝに於て、重舉大に拙齋を奇とし、即ち答ふるに、妄語せざるより始むるを以てし、其箋を相傳へて、徧ねく同人に示し、乃ち互に相目す。拙齋亦た憬然として、感悟するところあり、問答終日、雜事に及ばずして、退く。すてにして歸るや、宋學を郷里の間に倡ふ。遠近群至、鴨方の僻境、拙齋あるを以て、爵として一都聚となる。魯堂之を阿波侯に薦むれども、辭して就かず。寛政異學の禁を布くや、赤松滄洲、書を栗山に贈つて、之を論ず。拙齋乃ち書を滄洲に與へて、其非を忠告す。本居宣長、しきりに書を著して、堯舜周孔を誦るや、拙齋之を惡み、乃ち山上億良に擬して、反感歌を作り、別錄一卷を附して、其説を駁す。魯堂死するや、阿波侯、しきりに之を聘せしが、固辭して従はず。次子謹をして、往いて賜を拜せしむ。加賀侯、又之を徵せども、應ぜず。これより先、本藩池田侯、長子慎に賜ふに、俸二口を以てし、重ねて三口を加へ、以て侍醫となし、拙齋の餘年を養はしむ。寛政十年歿す、年六十四。

中井竹山、名は積善、字は子慶、大坂の人。父を發菴といひ、碩學を以て著はる。竹山少にして、弟履軒とともに五井蘭洲を師とし、蘭洲死するや、兄弟相講習切劘す。竹山豪邁卓



容、容貌瑰傑、人と接するに襟懷伉爽、談笑豁如、間ま諧謔を雜へ、毫も腐儒の態なく、博學洽聞、古今を貫綜し、家學を以て程朱を崇尊す。然れども、平生の志業、王魯齋を以て自ら比し、吾が邦一種の朱學、徧陋固滯の風を喜ばず、故に朱說疑あれば、犁然明辨、經旨を得るを以て旨となし、自ら稱して一家の宋學といふ。又述作を好み、徳川家康の遺事を網羅して、逸史十二卷を撰す。幕府命じて其書を進納せしめ、賞するに時服を以てす。白河侯、大坂を巡視するや、禮を厚うして引見し、經義を講ぜしめ、又時務を諮詢す。竹山退いて草茅、危言を爲つて獻ず、その所論、皆時事に切なりといふ。はじめ、父發、菴、懷徳書院を興し、竹山承けて院長となる。大坂大火、書院亦た災に罹る。竹山、乃ち江戸に往き、上書して、之を再建せむことを請ふ。幕府、黄金三百兩を賜ひ、以て土木の資を助く。庠成るや、學者日に進む。竹山仕官を好まず、薩摩肥後の兩侯、皆祿を重うして、之を聘すれども、應ぜず。文化元年歿す、年七十五。

竹山の弟履軒、名は積徳、字は處叔、人と爲り、志氣高尚、交苟くも合はず、妄に戸を出て、自ら幽人と號し、隱居放言を以て自ら居り、談論奇僻、動もすれば人聽を驚かす。書生來り論ずるあれば、曰く、汝先づ酒を飲むを學べ、而して後、以て文を學ぶべし、然らざれば、鬱悶病を發して死せむと。姿貌魁秀、器宇曠邁、一世を睨視す。然れども、人と語る、庶民

間の孝子順孫の事狀に及べば、容を動して稱賛し、藉藉已ます。少より老に至るまで、屹として經旨を考索し、手に卷を釋かず。はじめ、七經雕題略を著し、晩に又七經逢原を著し、經旨を發明するや、益す精緻を致し、世、その儔罕に、巍然として別に一家言を爲す。しかも、人に知らるゝを求めず。兄竹山死するの後、毎月數次、懷徳書院に於て、門弟子の爲に尙書を説き、謂つて曰く、伯氏の經業、小子當に學ぶべし、幽人の事の如きは、必ずしも倣ふべからずと。文化十四年歿す、年八十五。

朱學振興の後、門戸を張るの風、全く其跡を絶ちしと雖も、仁齋徂徠の當時、辯難攻撃、刀戟相摩する壯觀は、復た再びすべからず。加ふるに樂翁の革正、浮文を戒しめ、實用を先とせしを以て、士子文儒を以て自ら稱するを屑とせず、皆大義に通ずるを以て足れりとなし、その腴を味ひ、その馥を啖ふもの罕に、これ經術の振はざる所以なり。たゞ三博士等、すべて崎門の固陋に鑑み、詞章を勸め、その自ら奉ずるところ、亦た正を失はざりしを以て、昌平黉の儒生、詩文に長ずるもの、少からず。若し夫れ、當時社會の内部に於て、潛勢力を蓄積せしものを擧ぐれば、陽明學と水戸學とあり。その政治上に實現したる結果は、やがて尊王攘夷乃至王政維新の大業となる。以下數章、之を考覈し、最後に幕末の儒家に及び、以て本書の煞尾となすを得む。



## 第二十三章 最近の陽明學派

熊澤蕃山の死に先つこと二十二年、寛文九年、三輪執齋生る、又實に陽明學派の翹楚なり。名は有賢、字は善藏、又躬耕廬と號す、京都の人、蕃山を始め、三重松菴、三宅石菴、皆京都より出づ、おもふに、陽明派の開祖中江藤樹、かつて暫く京師に教授せしことあり、又江西書院に學びたる藤樹の門人にして、王學を京師に唱へし者、二三その人あり、或はその感化ならむか、執齋の祖先は、大和三輪神社の司祝なり、父を澤村自三といひ、醫を業とし、京都に住す、母は若尾氏、執齋六歳の時、母を失ひ、十四歳の時、父を失ひ、市人大村氏に養はれ、後出て、眞野氏を嗣ぎ、後又本姓三輪氏に復し、祖先の祭を爲す。執齋十八歳にして、志を立て、江戸に赴き、佐藤直方に學ぶ、直方は、かつて前に述べし如く、山崎闇齋の高弟にして、固より程朱の學を主張し、痛く王學を排斥せし者なり。執齋その門に在り、親しく朱學を聞きしに拘らず、反つて私に王學に歸し、その多く己に益あるを喜び、之を講究して怠らず、遂に直方の爲に絶たれ、暴言を受くるに至る、執齋往いて懇へむと欲すれば、門人の怒に逢うて容れられず、是を以て困むこと數年の久しきに及ぶ。

然る後、直方その學を變ずるの意、名利の爲に非ざるを知り、遂に再び相見ること、故の如し。直方病革まるの日、子弟に命じ、先づ往いて執齋に告げしむ。執齋往いて之を訪ふ、命すてに絶えて、相及ばず、因つて、終夜柩前に侍し、歌を賦して之を哭す。執齋かつて、直方の推薦により、酒井候に事へしも、後、仕を致して、去り、京都に歸り、尋いで大阪に之き、又江戸に來り、數年の間、居止定まらず、後居を下谷泉橋に卜し、講舍を創して、明倫堂といふ、これ關左に於ける陽明學流布の權輿なり。門人頗る衆し。時に徂徠すてに逝き、門下の南郭、金華等、皆文人のみ、執齋ひとり木鐸を以て自ら任じ、道を講する、甚だ力む、耳順を過ぎて、啖咳の患に嬰り、病勢日に熾なり、因つて輿して、京師に歸り、寛保四年正月歿す、年七十六。

執齋學術醇正、毅然として師表となり、専ら行實を以て、人を風化し、薄稟の徒と雖も、岐路に迷はざるを得たり。梁田蛻巖が中井養菴に復する書に曰く、輪氏を徵かつせば、姚江の學を道ふを聞くを得ず、その陶鑄するところ、果して、誣ゐず、第今江左の儒人、詞藻を以て名あるもの、南郭、金華、諸才子の如き、姑らく是を置き、鐸を四方に振ひ、大に聖學を倡ふる、斯人を含いて、其れ誰ぞや、むかし、文中子、道を河汾に講じ、王魏房杜の曹、達材成德、安んぞ他日、東都の賢士大夫、體を明かにし、用に適し、寛景公と相弟昆たるもの、



輪門に出てざるを知むや、吾儕當に目を拭うて俟つべしと。その聲望、想見すべし。然れども、王魏房杜、不幸にして、その人なく、唯だ一人の川田雄琴ありしのみ、その精思力行、又贊するに足れり。

執齋の功、最も稱すべきは、傳習録の校刻に在り。これ王學をして其統を絶えしめざりし理因なり。傳習録に註あるは、此書を以て始とし、その後、唯だ佐藤一齋の欄外書あるのみ、その他、著書亦た少しとせず。日用心法、四言教講義、雜著の類、皆人間有用の書たるに負かず。

執齋と前後して、三重松齋あり、雄琴と同時に、三宅石菴、中根東里あれども、皆振ふ能はず。陽明學は、こゝに又一弛をなし、以て後來の振興を待てり。

徳川氏の盛時、之を前にして、元祿貞享あり、之を後にして、文化文政あり、世を擧げて、奢侈を事とし、士風の廢頹、濟ふべからず。就中後者に在りては、後年衰亡の兆を胚胎したる者なり。これより先、寛政の間、白河樂翁、銳意治を圖りしも、殆んど救治すべからず。北狄の警、頻に到り、高山蒲生の徒、讜言を唱ふ。而して、異學の禁は、むしろ、在野學者の懶眠を攪起せしものにして、その結果、多少觀るべきものあり。實用の學、亦た興り、頓に緩急の用に供せむとす。その尤なるもの三人、佐藤一齋は、安永元年を以て生れ、頼山陽は

安永三年を以て生れ、大鹽中齋は、寛政六年を以て生る。皆姚江に傾き、且つ後世に偉大なる影響を與へしものなり。しかも、中齋最も純、次にその路傳を掲げ、他の二人は、後章別に述ぶるところあるべし。

大鹽中齋、名は後素、字は子起、平八郎と稱す。又居るところの室を名づけて洗心洞といふ、易の繫辭に本づくなり。中齋は、元と徳島藩老稻田氏の臣、眞鍋市郎の二男にして、寛政五年、阿波美馬郡脇町に生れ、幼にして母を喪ひはじめ、其縁故を以て、大阪の鹽田喜左衛門に養はれしが、故ありて、之を去り、天満與力大鹽平八郎の養子となる。時に年七歳、養父母、偶々其歳を以て没し、養祖父政之丞に因つて鞠育せられしといふ。幼時如何に學を爲せしか、今詳ならずと雖も、文武を兼修し、功名氣節を以て、祖先の志を繼がむと欲し、與力の職に居り、閱歷を累ぬるの間、學問の必要を感じたるもの、如し。こゝに於て、江戸に赴き、林述齋の門に入り、刻苦勵勉、同門の模範たり。中齋又學問の餘暇を以て、力を武術に用ひ、刀銃弓槍、悉く其技を修め、殊に、槍術に至りては、關西第一の稱あり。會々養祖父政之丞、重症に罹り、その報至るや、倉皇旅裝を整へて、大阪に還りしが、尋いで逝く。こゝに於て、家に留まり、復た與力の職に服す。時に年二十六。文政三年、高井山城守、山田奉行より轉じて、大阪東町奉行となる。その人、鑑識に長じ、中齋の才氣絶倫な



るを看取し、擢んで、吟味役となす。時に年二十七、大阪の吏、愛憎に因つて刑罰を變じ、金錢に因つて生殺を取捨するの風あり、故を以て、市民の胥吏を畏惡すること、蛇蝎の如し。中齋この弊を革めむと欲し、邪を折き、正を救ひ、奸を懲し、善を助け、就中京都八坂の妖巫益田貢を誅戮し、大阪西町の奸吏弓削新左衛門を割腹せしめたる如き、その最たるものなり。こゝに於て、中齋の名大に揚がる。すてにして、山城守、年七十に近く、劇職に堪へざるを以て、病と稱して、骸骨を乞ふ。中齋復た知己に遇はざるを慮り、山城守の辭職、未だ允されざるに先つて、致仕し、養子格之助をして、職を繼がしむ。時に年三十七。これより、専ら學を講じ、書を著し、併せて子弟を教授す。天保三年六月、古本大學刮目を脱稿して上木し、同月近江に遊び、藤樹書院を訪ふ。この行、深く藤樹に感ずるところあり、加ふるに、歸路湖上に泛びて、颶風に遇ひ、反つて良知の旨意を體認するを得たりといふ。その後、數回、小川村に赴き、藤樹書院に村民を聚めて、良知の學を講じ、或は近江聖人の再生となせしと傳ふ。天保四年、洗心洞割記と儒門空虚聚悟とを上木せり。割記は、その獨特の學説を叙述せしものにして、一生の心血を注げり。乃ち一本を伊勢の神庫に獻じ、一本を富士絶頂の石室に藏し、以て後世堙滅するなからむを期す。その翌五年、増補孝經彙注を著す。以上稱して、洗心洞四部書といふ。かくの如くして、中齋は、専ら講

學に従事せしと雖も、高井氏以後の諸奉行は、皆その威望と才學とに服し、その施政に關して往々諮詢せり。就中、矢部駿州の如きは、中齋の最も親善せしところなり。駿州名は定謙、幕末の能吏。後謫せらるゝや、幽囚數年、食を絶つて死す。晩年、藤田東湖と交り、東湖の雜著中、その言行を記するものあり、中齋の事に關するもの數條散見す、ともに參核に資すべし。

天保七年春、駿州轉じて、江戸勘定奉行となり。四月二十六日、跡部山城守定弼、代つて大阪町奉行に仕ぜらる。山城守、器宇甚だ凡、遂に中齋をして、亂をなすに至らしむ。これより先、天保二三年の頃より、氣候不順にして、年穀登らず。四年に至り、殊に甚しく、その後、又甚しく、七年全國大に饑ゆ。中齋之を坐視するに忍びず、その子格之助をして、山城守に見え、大に倉廩を開いて、貧民を救賑せむとを請はしむ。山城守之に答へ、約するに四五日の後を以てし、中齋大に喜ぶ。然れども、遷延彌久しく、遂に其事なし。格之助をして、促がしむるも、要領を得ず。峻請數回、山城守、答ふるに、江戸へ米穀を廻送せしを以て、姑らく賑恤に及ぶ能はざるを以てす。こゝに於て、中齋憤慨して措かず。更に轉じて、市井の豪賈を説き、金を借りて、自ら貧民を救はむとす。山城守又陰に之を妨げ、萬方を術を盡す。中齋乃ち大に怒り、一切の藏書を賣却す。その部數、一千二百にして、價六百



五十兩、こゝに於て、一萬枚の切手を製し、盡く之を窮民に施與す。山城守之を聞き、以て名を賣るものとなし、格之助を召して、大に譴責を加へしといふ。凡そ是等の事、すべて中齋を憤慨せしめ、遂に一朝その身を忘るゝに至らしむ。今にして之を思ふに、中齋必ずしも責むるに足らず、その情、大に恕すべきものあり。況んや、その擧、たゞ幕府の無法を攻むるに出でしものにして、皇室に對する敬意を失はざるに於て、あや、之を呼んで大逆となすは、頗る酷なるのみならず、維新の大業、彼に負ふところ、固より少しとせず。中齋は學者たりしと同時に、自ら革命の犠牲となりしもの、その志や、欽すべく、その命や、悲むべきなり。天保八年二月十九日、中齋遂に兵を擧ぐ、これより先數日、檄を遠近に移す。文中に左の言あり。

天子は、足利家以來、別て御隱居御同様、賞罰の柄を御失はれ候に付、下民の怨何方へ告愬とて訴ふる方もなき様に亂れ候に付、人々の怨氣、天に通じて、年々地震火災、山も崩れ、水も溢れるより、外の色々、様々の天災流行、終に五穀飢饉に相成候、是皆天より深く御誠めの有難き御告に候へども、一向上たる人々、心も付かず……天子御在所の帝都へは、廻し米世話も致さざる而已ならず、五升壹斗位の米を買ひに下り候者共は、召捕などいたし……堯舜天照皇太神の時代に復しがたくとも、中興の氣

象に恢復して立戻し可申候。

その徒、聚るもの數百人、先づ豪賈輩の家屋を焚燬し、倉庫を破壊し、金穀を四散し、貧民の取るに任かす。すてにして、山城守と兵と戦ひしも、利あらず。黄昏に及び、或は死亡し、或は逃散し、餘すところ、僅に八十餘人、乃ち其徒を散じ、自ら亦其跡を晦ます。この日、火勢熾にして、翌二十日に至り、益す甚しく、遂に全市四分の一を焼失す。こゝに於て、逮捕愈よ急、その徒、或は縛に就き、或は自殺し、或は自首するもの、前後數十人、而して、中齋父子の踪跡、未だ分明ならず、越えて一月、三月下旬に至り、その賤賈に隱るゝを訴ふるものあり、吏卒來つて之を捕へむとす。中齋之を知り、格之助とともに火を縱つて焚死す、時に年四十四。

中齋の門人、多くは與力なり。然れども、他より遊學せしもの少からず。門人常に四五十人、前後を通じて算すれば、千人に上るべし。その中、宇津木矩之允、最も卓偉にして、かつて塾頭たり。中齋の事を擧ぐる前、長崎より還り、其家に在り、中齋之に勸めて、其黨に加らしむ。矩之允、切諫すれても、聽かず。乃ち其僕を郷に歸し、自ら死を期し、同門の士の爲に殺さる。中齋、交道廣からず、ひとり近藤重藏と意氣相投ぜり。重藏は、擇捉島の探險を以て名あり。その學識才力、一世に冠絶し、平山行藏、間宮林藏とともに、寛政三藏と稱



せらる。兩人はじめて會見せし時の如き、千古の話柄として傳ふべきを覺ゆ。然れども、中齋が最も尊重せし唯一の知己は、實に頼山陽なりき。山陽は本と文人に過ぎずと雖も、かの誤謬多き外史政記と、格律上頗る議すべき數十篇の史詩とが、能く維新志士を興起せしめしを思はゞ、亦た斷じて庸流に非ず。山陽は、中齋を以て小陽明となし、中齋は山陽が陽明の文章功業に心服せしを悦び、肝膽相照し、管鮑も管ならず。山陽の詩文、中齋の事に及ぶもの、少しとせず。その天保元年七月、中齋致仕して、尾張に適き、その祖今川氏の跡を弔ひ、兼ねて舊族を訪はむとするや、送序一篇あり。文字大半堙晦、詳にし難きものありと雖も、慷慨激越、斫地の王郎に對するの概あり。又かつて中齋を訪ひしとき、趙子昂、蔗雁の圖を觀て、心之を欲し、中齋その意を悟り、之を贈りしを謝せしが如き、その歸途、菅茶山の遺愛の杖を失ひ、中齋吏をして之を索めて還せしを謝せしが如き、文字の裏面に、無限の情緒を見る。而して、訪大鹽君、謝客而上、衙作此贈之と題せる一篇に至りては、當に中齋の小傳に充つべし。曰く、上衙治盜賊、歸家督生徒、瘳卒候門取裁決、左塾猶聞喧咄晤、家中不納鬻獄錢、唯有繚々萬卷書、自恨不暇仔細續、五更已起理案牘、知君學推王文成、方寸良知自昭靈、八面應鼓有餘勇、號君當呼小陽明、吾來侵晨未及出、交談未半戒鞭備、留我恣抽滿架帙、坐聞蟬聲在詹榭、巧勞拙逸不足異、但悲罄折傷利器、祈君

善刀時善之、留詩在壁君且視、と。

中齋と一齋と、ともに林家に學びしも、その初、固より深く相識るに及ばず、洗心洞劄記の成るや、書を添へて、之に送り、その批評を求む。一齋乃ち復書して曰く、

就中太虛之說、御自得、致敬服候、拙も兼々靈光之體、即太虛と心得候處、自己にて太虛と覺え、其實意必固我之我を免れず、認賊爲子之様に相成、難認事と存候、貴君精々此所御着力被成候得ば、即御得力爰に可有之と存候、尙も實際に御工夫被着かしと祈入候事に御坐候。又拙も姚學を好み候様被仰越候處、何も實得之事無之、赧羞に堪ず候、姚江の書、元より讀候得ども、只自己の箴砭に致し候のみにて、都而之教授は並之宋說計に候……只自己に而乍不及、廻哲之實功を骨折、夫よりして君心之非を格して、遂に治務之間にも語り候得ば、漸々人之家國に寸補可有之哉に存候。兎角人は實を責ずして、名を責むることかと被存候、名にて教の害を成す事少からず候得ば、務めて主張之念を祛りて、公平之心を求め度候。

兩者氣風の差、學問の異、亦た概觀すべし。一齋には四錄あり、中齋に四部書あり。但しその學説は、王學の性質上、固より、特殊の者、多からず、且つ餘白なさを以て、こゝに略す。山陽の死、中齋に先つこと五年、而して、中齋死後、一齋なほ存し、ひとり官學の一隅に



在り、世運の變遷して目撃したる後、逝けり。その門下の諸家、陽明學を奉ずるもの、皆實用事功の人なり。秋陽、方谷、草庵、芝陵、すてに然り。而して佐久間象山に至りては、開港論者にして、宇内の大勢に洞視するところあり。その門に吉田松陰を出し、又陽明學に負ふところ少からず。その松下村塾は、維新功臣、健兒時代の巢窟なり。その門弟中、最も卓犖なるを高杉東行となす。その學、亦た同じ。その他、西郷隆盛、横井小楠、真木保臣、鍋島健叟等、いづれも多少の縁故を有するものなり。

## 第二十四章 頼山陽

頼山陽は、一個の文人のみ、經術の造詣如何を以て、之に責むるは、甚だ酷なり。然れども、彼が國家經濟に關すると見解と、修史の功と、華洛の司盟たりしとの三事は、前後殆んど其匹なく、固より不朽たるべきを疑はず。

山陽の父を春水となす。その傳前に見ゆ。その人、農家より起り、心を洛閩の學に潛め、聲望一世に高し。弟二人、一は惟強、字は千齡、春風と號す。その郷安藝の竹原に在り、醫を業とし、兼ねて詩及び書を善くす。その次は惟柔、字は千棋、杏坪と號す。郡宰となりて、治

績あり、尤も詩に長ず。著すところ、春草堂詩鈔八卷、傳ふべきの作、その大半に居り、尤も古體に長じ、その險韻を用ひ、奇句を遣るや、韓昌黎に神似するところあり。近體の生硬、亦た黄山谷に似たりと稱す。頼氏三人、皆重名あり、その家學を想ひ見るべし。

山陽、名は襄、字は子成、通稱久太郎、京に入りし後、三十六峰外史と號す。春水、はじめ大阪に寓して、徒に授け、處士飯岡氏の女を娶り、安永九年を以て、山陽を江戸堀に生む。天明元年、春水の聘せられて、廣島に移るや、之に従ふ。山陽生れて、聰敏、甫めて六歳、忽ち母に問うて曰く、天は何なる物ぞや、と。母曰く、旋轉止まず、彼の如きのみ、と。山陽遽に庭に下り、天を仰いで、嘆じて曰く、不思議なるかな、と。啼泣半時ばかり。八九歳より喜んで國字本古今軍記を読み、寢食を忘るゝに至り、嬉戯するや、又土を搏して、城郭軍營の狀を作る。すてにして、句讀を受け、晝夜懈らず。かつて眼を患ふ、父、固く之を禁ずるも、陰讀して止まず。年甫めて十三、春水祇役して江戸に在るや、詩を作つて、之に寄す。柴野栗山之を見て、大に嘆賞を加へて曰く、千秋子あり、之に教へて、實材となさず、乃ち詞人たらしめむと欲するか、宜しく其れ史を読み、古今の事を知らしむべし、而して、史は通鑑綱目より始めよ、と。會々薩藩文學赤崎元禮、國に歸らむとし、廣島を過ぎて、之に告ぐ、因つて感奮し、日に綱目を讀む、然れども、治亂の大勢を記するのみ、書法發明等、讀むを屑と



せず、栗山聞いて益す之を奇とす。年十四五、家學を受け、小學、近思錄、皆すてに誦習す。一日、曝書に因り、東坡の論策を見、驚喜して曰く、天地間、かくの如く喜ぶべきの文あるかと。遂に力を文章に肆にす。年十八、叔父杏坪に従つて東遊し、尾藤二洲の塾に在り、一年にして歸る。才學日に進む。然れども、多病を以て仕籍を免ず、二弟あり、皆夭す。一妹、藩士某に適く、春水、因つて春風の子元鼎を養うて嗣となす。元鼎、字は新甫、後、府學訓導となり、二十六にして卒す。性聰敏、幼より詞章に工なりといふ。文化七年、菅茶山、山陽を請うてその塾生を督せしむ、乃ち備後に遊ぶ。明年去つて京都に遊び、終に止まる。時に年三十二、車屋街に僑居し、銅駝街に移り、又木屋街に徙る。文化十三年二月、春水の疾篤きを聞く。時に徒を聚めて、莊子を講ず、即ち卷を投じて起ち、晨夜之に赴き、京より廣島まで、殆んど百里、五晝夜にして至る。至れば、及ぶなく、遺憾自ら置く能はず、之より終身復た莊子を講ぜず。これより先、元鼎早世、はじめ山陽の廣島に在るや、藩士御園氏の女を娶り、元協を生む、故あつて之を去る。こゝに於て、元協嫡孫を以て、祖の後を承く。文政元年二月、父の大祥忌に際し、廣島に歸展し、喪除くや、遂に鎮西に遊び、豊筑より肥に入り、長崎に留まること二月、南薩隅を極む。かの耶馬溪の奇勝を探りたるも、亦た此行に在り。明年春、廣島に歸り、母を奉じて京に入り、芳野寧樂の諸勝に侍遊し、秋送つて廣島に至

り、爾後西省虛歲なし。後、數ば之を迎へて、伊勢及び琵琶湖等に遊ぶ。山陽すてに客寓、家を治むること儉素、妄りに一錢を費さず。然れども、その母を迎ふる、有無を問はず、務めて懽心を奉ず。一日、島原に侍遊し、一大酒樓に登り、妓樂を召して、酒を侑め、朱觥銀盤、その豊美を盡す。従行の婢、之を見て愕然、竊に山陽の袖を引いて曰く、阿主囊中の物、以て之を償ふに足るか。と。蓋し山陽壯にして磊落放縱、屢ば父母の憂を爲し、國を去つては定省を闕き、深く自ら悔恨し、固極の萬一を報せむと欲す。而して、春水すてに逝きしを以て、専ら之を母に奉ぜむとするなり。六年、家を三本木に買ひ、水西莊と稱し、庭中梅花竹樹を雜植し、扶疎蔭をなし、一小草堂を置き、鴨水に臨み、東山に對し、山紫水明處と稱し、春花秋葉の候、皆坐して知るべく、候至るや、輒ち童を携へ、瓢を佩ひ、飄然出游、その他、近畿の名勝古跡、游履殆んど遍し。その遊ぶや、期を預せず、輿至れば即ち往く。天保元年、胸痛を患ひ、久うして愈ゆ。三年六月、忽ち咳嗽を發し、咯血す。醫曰く、これ積年勞神の致すところ、謂ゆる肺血、疾、治すべからず。先生は豪傑、死を怖れず、故に敢て實を以て告ぐ。一醫曰く、猶ほ療すべし。と。山陽曰く、死生命あり、然れども、我、上に老母あり、且つ志業未だ成らず、たとひ一生理なきも、宜しく醫療を加ふべし。我、慎んで藥を服し、傍、死計を爲さむのみ。と。時方に日本政記を著す、乃ち日夜勉強して、稿を構ふ。曰く、我、必ず之を成し



て、地に入らむと欲すと。秋に及びて、疾益す劇し。母の之を憂へむことを慮り、家人を戒めて告ぐるなからしめ、唯だ報ずるに微恙、尋いで愈ゆべきを以てし、往復の書牘、勉強して筆を執ること、平常の如し。はじめて病みしより、酒を禁じて飲まず、客至れば爲に筵を設け、談笑自若。疾すでに革まる、曰く、我、死方に逼ると。然れども、猶ほ眼鏡を着け、政記を手にし、刪潤して止まず、忽ち左右を顧みて曰く、且つ喧うする勿れ、我、將に假寝せむとすと、乃ち筆を聞き、眼鏡を脱せずして瞑す。就いて、之を撫すれば、すでに逝く、實に九月二十三日、享年五十三。東山長樂寺に葬る。山陽京に入り、小石氏を娶り、三男を生む。曰く、辰之助、天す。曰く、又二郎、名は復、支察と號し、後、家を承く。曰く、三木三郎、名は醇、壯にして節に死す。

山陽が西遊中の事實及び逸話に就いては、考察を値するもの少からざれども、餘白なきを以て、こゝに述べず。彼は才の人なり、詩文を善くし、書畫亦た觀るべし。かの舉世傳播頼家脚、都門一樣字、渾肥といひしもの、其書の當時に行はれしを知るべく、耶馬溪圖卷記及び畫を論ずる詩を觀れば、丹青の技に指を染めしを察すべく、これより得たる潤筆は、彼の生計たりしや必せり。然れども、彼は單に才の人にして止むものに非ず。かつて自ら曰く、我を才子といふは、未だ我を悉さざるものなり、我を能く刻苦すとい

ふは、眞に我を知れり、と、西游稿中の詩の如き、自ら序して意を經ざるものと云へども、經營刻苦の餘に出てしは、その證、固より多し。塙浦行の古詩の如き、その初稿に於ては、唯だ後半のみ、その他、推して知るべし。經術の如きは、その性の適するところに非ず、かつて曰く、我に一字の宗旨あり、曰く、實、又折して兩字となす、曰く、適用と。經世有用、すてに其學の本領なり、故を以て識見を貴び、勢と數とを談じ、讀書唯だ大義に通ずるを旨とし、人に教ふにも判斷を先とす、これ彼が一代の通儒として、教育史上、多少の功績を認むべき所以なり。而して如上の傾向は、彼をして、一種の史論家たらしめ、揣摩推轂、勢を審にし、情を穿ち、頗る造詣あり、その見地、甚だ高きを疑はず。著すところ、日本外史二十二卷、日本政記十五卷、通議二卷、春秋講義若干卷、先友錄一卷、文集十卷、書後題跋四卷、日本樂府一卷、詩鈔八卷、同遺稿八卷、文稿二卷、その他、韓蘇詩抄、小文規則、古文典型等あり、皆以て識力才氣を概見すべし。

山陽の文、叙事に長ず、その主奉するところは、龍門の神髓に在り、而して論策は東坡に得るところ多し。外史の書、之を歴史として見れば、事實の考據、固より足らず、從つて、誤謬甚だ多く、且つ其論の如きは、之を前にして、准后親房の神皇正統記、之を後にして、新井白石の讀史餘論に資り、癡思創見殆んど之なしと雖も、一家の私史として、その勞



固より多とすべく、將門の沿革を叙し、尊王の精神を鼓吹したるの功、固より大なり。蓋し當時の士人、和文に嫻はず、故を以て、這般の著述は、最も時世に適したるものにして、その普及の盛なる、今に至りて衰へず而して、某々諸藩の如き、藩學の子弟を戒めて、之を讀むを禁ぜしといふ、その覇府を輕んずるを恐れて然るなり。外史の成るや、二十年を費す、その間、數回稿を改めしは、現存せる自筆の稿本に對照し、兼ねて苦心を見るべし。すでに成るや、猶ほ之を家に秘す。白河樂翁、之を聞いて、禮を卑うし、幣を厚うし、以て之を請ひ、はじめて世に行はる。一生あり、之を請ひ、後又來り促して曰く、一權貴に獻せむと欲すと、山陽色を正うして曰く、我が史は、權門嫻を容るゝ具に非ずと、竟に與へず。以て其氣概を見るべし。外史の文、奇氣横生、固より然るところ。政記は、最も晩年の作、記事多く病中に成る、蓋し栗山潜録の保建大記等に倣ふ者なり。時に猪飼敬所、來り訪ひ、談南北正統の事に及ぶや、議大に合はず、敬所すでに去る。曰く、苟くも、北朝を以て、正統となせば、豈に新田楠諸公を以て、亂臣賊子となすかと、方に之を言ふの時、目張り、眉軒り、その慷慨激烈、病むと雖も、衰へず。遂に正統論を著して、政記初論の後に置く。この書、山陽歿後、門人輩の手に因つて、整治せられ、水戸豊田天功の校讎を経て、上木せしものといふ。その他、文集中、載するところ、觀るべきもの少からず。百合傳、高山彦九郎傳、耶馬

溪園卷記等、最も誦すべく、ともに敘事の精緻を以て勝る。若し夫れ、書後題跋に至りては、東坡の小品を讀むが如く、短篇零章、風神絶えむと欲するを疑ふものあり。又その詩を論ずるや、議論甚だ公正を推す、彼は東坡の崇拜者にして、その詩々兩道に長ずるところ、亦た頗る相似たり。天才すでに警拔、杜韓蘇三家の詩に於て、最も力を得、七古は、最も得意となせしところ、開闔變化、往々にして測るべからざるものあり。然れども、予の私見を以てすれば、楠公墓下作及び筑後川の長古の如き、罅漏未だ補直するに及ばず。但だ壇浦行、佛郎王歌、倪文正公眞跡引、興國鐵鈴歌の如き、殆んど完璧を推す、彼は對仗に屑々たるものに非ず、故に律體に至りては、拙を藏するの手段に出で、その作、亦た多からず。七絶に至りては、不用意の中に、頗る得るところあり。蓬窓月暗、樹如烟、拍岸波聲、驚客眠、默數浮沈十年事、平公塔下兩維艚、の如き、客恨逢春不解消、平蕪斷靄路迢迢、銅陀橋畔千株柳、五見東風上柳條、の如き、危礁亂立大濤間、決背西南不見山、鶴影低迷帆影沒、天連水處是臺灣、の如き、蘇水遙遙入海流、檣聲雁語帶鄉愁、獨在天涯歲將暮、一蓬風雪下濃州、の如き、酒家粉壁映晴波、官道迢迢渡淤河、風景依然人欲老、楠公墓下十經過、の如き、夾水層巒黯翠然、濛濛山驛雨成煙、黃梅時節岐蘇路、回首曾游十五年、の如き、不同此夜十三回、重得秋風奉一卮、不恨尊前無月色、免看兒子鬢邊絲、の如き、風神綽約ともに晚唐の



佳調なり、山陽の作、いづれも史事に關係あり、最も咏史を喜ぶ、曰く、余、咏物を欲せず、咏物は咏史に若かず、史中無數の好題目あり、讀者の淺深に隨つて、皆眞詩を成すべし、之を置いて、雁字鶯梭といふ爲すなきなり、と、又竹枝を排斥せり、これ疑もなく、詩佛五山末流の弊に憤激せしものなり、咏史の作、集中指を屈するに暇あらず、而して、最も傳ふべきを日本樂府となす、全卷六十六闋、蓋し當時日本の國數に象り、歴代の史實を咏ぜしものなり、田能村竹田、之を評して曰く、六十六闋、吾が邦開闢以來、この文字なかるべからず、而して、人未だ做さざりしものと、又曰く、近人詠史の諸作、巧に似て、黠深に似て、淺、晚唐人劉項元來不讀書等と大抵相類す、故に余、咏史咏物の二體に於て、甚だ讀むを喜ばざるなり、六十六闋の如きは、則ち否らず、毎誦數遍、手を措くに忍びず、その議論するところ、諷するが如く、論するが如く、或は華、或は朴、漢人の樂府に似、又漢人の童謠に似たり、蓋し山陽の學、古に遂才、詩に妙なるが故なり、と、樂府の作、之を上にして、李西涯、之を下にして、尤西堂あり、山陽之を擬せしこと、固より論を俟たずと、雖もその諷諭の本旨に至りては、夔然として異なるものあり、必ずしも西轍に倣はず、以てその孤詣の處を見るべし、若し之に對するものを求むれば、ひとり中島子玉の咏史樂府あるのみ、山陽を以て學者となせば、恐らく當時第二流以下なるべし、その家學は洛閩に在り、

加ふるに、新創の見を出さず、然れども、彼が大鹽中齋と交り、且つ陽明の學に對して、同情を缺かざりしを觀れば、革命的精神を包藏せし熱血兒にして、彼の天職は、之を世に宣布するに在り、しのみ、この時に方り、一齋良齋の徒、東都に在り、その著述文章、前古に比なしと雖も、當時の風氣を變じて、人心を動かすの大なるは、到底山陽の什一に及ばず、見よ、かの吉田松陰の如き、その少年、躬耕活を爲すの時、隴上に鋤を杖て、實に東海大魚振鬣尾を歌ひ、誓を決して、東天を睥睨せしものなるを、文士として、山陽の功、豈に偉ならずといはむや、蒙古來の一首の如き、長しへに我邦に於ける祖國の歌、もしくはマルセーユの曲に充つべきものなり。

山陽の門下、從學せしもの少からず、而して文には森田節齋あり、詩には藤井竹外あり、兩者名或は實に過ぎ、氣節風流、亦た遠く其師に及ばず、こゝに於てか、替人を出さざる彼の才力の獨絶なること、愈よ見るべきなり。

## 第二十五章 水戸學の消長

關左の風氣、古しへより豪健と稱す、日高見の國に蝦夷人種の聚散せし當初は、姑ら



く之を措き、八州の野は土豪の割居するところにして、四塞の固能く天下に敵すと稱せられ、鎌倉覇府の創立は、明に之を證しぬ。金澤文庫、足利學校は、この土にも文化の餘光を被らせしも、居然として、關東的なるを失はず。源實朝の金槐集、太田道灌の慕景集の如き、到底武人の文學にして、織美軟弱以て習とせる三十一字中に在りては、たしかに異色を推すべし、而して、這般の風氣は、徳川氏に世に至りて、猶ほ儼存し、やがて市井の俠者を輩出せしむるに至りて、愈よ彰著なりき。

水戸の地たるや、關東の邊隅に位し、提封三十萬石、之を紀尾二藩に比すれば、固より其半に及ばざれども、奥羽諸侯を牽制するの要術に當り、幕府が之を股肱とせしもの亦た宜なり、而して、この地の文學、一種の特色あり、然る所以は、義公の修史に本づき、京洛の儒士を招集するや、忽ち風土の感化を受け、一層明晰となりしが故のみ、抑も水滸修史の由來、之を括言すれば、林家の本朝通鑑、日本の始祖を以て、吳の太伯の胤となせしに憤激せしものといふ、而して、義公が彰考館を開き、學者を招聘せしは、實に寛文十二年にして、この際、特に注意すべきは、その聘に應ぜし學者の多數が、京儒にして、しかも閩齋派中の人だりしこと、是れなり。この徒の學術、各異なりと雖も、京儒として、共通の思想を有せしは、斷じて争ふべからず。詳言すれば、家光以後、關東の威權、愈よ盛にし

て、殆んど皇室を壓せむとするを見、覇府に對し、一種不快の念を抱きしこと、是れのみ。崎門の淺見綱齋、三宅尙齋及び藤門の并河天民の如き、好個の代表者なり。こゝに於て、彼等の多數は處士を以て自ら居り、遂に祿仕を求めず、翻つて義公の名聲を聞き、彰考館に入れりき。安積澹泊が、義公の創めて記傳を爲る、關西の英髦、府下に成集すといひしもの、即ち其證となすべし。史館のはじめて開きしとき、其員に備りしもの、辻了的、實に京師の人、人見懋齋、中村篁溪亦た其地の貫屬、その他、田止郎、佐々宗淳、青野叔元、大串元善、栗山潜鋒、三宅觀瀾等、皆然り。潜鋒に保建大記あり、觀瀾に中興鑑言あり、早くも、尊王賤霸の精神を發揮せり。その總裁たる安積澹泊、ひとり異なりと雖も、彰考館が京儒の排霸的思想を以て漲盈したるは、復た疑ふべからず。こゝに於てか、知るべし、一部の大日本史は、京儒的思想の凝聚物なるを、嗚呼、義公たるもの、何ぞ又その修史の結果が、後年宗家を覆すの原動力たるを豫期せむや。禮儀類典を著し、扶桑拾葉集を撰し、契冲等の國學者を聘して、士道を明にせむとし、楠公の碑碣を建て、明の遺臣朱舜水を禮遇し、孝子節婦を旌賞し、人心の維れ微なるを救はむとしたる一片好學の念は、自ら知らずして、京儒の新思想を疏導し、大義名分の説は、漸次に世に擴がり、水戸は終に維新大業の發動地となりしのみ。



義公自撰の梅里先生碑陰並銘に曰く、正潤皇統是非人臣、輯成一家之言と、修史の目的、すてに此の如く、かの神功皇后を却けて后妃傳に列し、大友皇子を本紀に掲げ、南朝を以て正統となし、神器の京に入るを待つて、はじめて皇統を後小松帝に繋ぎしが如き、その識見の存するところを觀るべし。大日本史編述の精神、すべて此の如くなれば、この事業を中心として發展したる謂ゆる水戸學の何物たるかは、亦た容易に推知すべし。水戸學は、霸府敎學の主義に従ひ、表面上、朱子學を崇奉し、その着色あるに相違なきも、朱子學の主張は、決してその目的に非ず、實は當時の通弊たる漢土崇拜の習俗を一洗し、神州の皇道を旨とし、之に矛盾せざる範圍に於て、儒敎を以て傍證に充て、主として、自國の史實を探究し、批判し、大義名分を明かにし、國家的觀念を養成するに資せむとす。而して、史館の創立者は、大抵闇齋派の學徒なれば、期せずして、這般の目的に適合せしが故に、水戸學はその形式上、神儒の調和に歸着せり。天保十二年、烈公齊昭、弘道館を開くや、自ら其記を撰して曰く、我が國中の士民、夙夜懈らず、この館に出入し、神州の道を奉じ、西土の敎に資り、忠孝無二、文武岐せず、學問事業、その效を殊にせず、敬神崇儒、偏黨あるなく、衆思を集め、群力を宣べ、以て國家無窮の恩を報ずれば、豈に徒に祖宗の志を墜さざるのみならむや、神皇在天の靈、亦た將に降鑒せむとす。こゝに於てか、

其廟に孔子を祭るとともに、武甕槌尊を祀り、西土の敎に交ふるに、神州の道を以てす。神州の道とは、他に非ず、神を敬し、王を尊ぶことにして、即ち尊王攘夷の精神に外ならず。之を要するに、水戸學は、決して當時の謂ゆる學に非ず、性理道德の説、すべて形而上の考察は、全く其眼中に在らず、一言すれば、闇齋一派、京儒の遺傳的思想の成形せしものにして、神儒の調和を主とし、種族的自尊の觀念に加ふるに、郷土的色彩を以てし、専ら國體論に重きを置きし、一個革命的精神、即ち是れのみ。

義公歿後、五十年を経て、寶曆明和の頃に至り、潜鋒、觀瀾、澹泊等、史館の偉才、相繼いで凋謝し、修史の事業は、依然繼續せしと雖も、甚だ振はず。文公に至りて、再び盛にして、史館亦た其人あり、其首に居るものを立原翠軒となす、實に近世水戸學派の翹楚なり。立原翠軒、名は萬、字は伯時、甚五郎と稱し、一に東里と號す。少にして學を好み、家貧にして、書を買ふ能はず、父蘭溪、之に謂つて曰く、盛年の時、勉めざれば、追悔及ぶなし、汝、當に心を專にして讀書すべしと。翠軒是に由つて、力を縦にして、書を讀む。この時、蘭溪、史館の管庫たり、恒に史館學衰へ、日本史を校勘するものなきを憂ひ、竊に翠軒に告げて曰く、吾衰へたり、能く爲すなし。汝、吾が志を繼ぎ、謹んで、義公の業を畢へよと。翠軒後、江戸に來つて、學を餘熊耳に受け、唐音を紀、徳民に學び、學成つて、水戸に歸り、儒員となり、



はじめて、漢唐の學を講ず。總教名越南溪、之を怒り、仍つて世と合はず淹滯年あり。文公學を好むに至り、擧げられて侍讀となる。こゝに於て、首に建議して、日本史を校勘し、義公の志を遂ぐべきを述べ、文公之を可とし、翠軒を史館總裁となし、これより校勘數年功を成す。翠軒、文公の知遇を得て、畫策するところ多く、水戸の學、復た盛なり。而して其後を承けしものは藤田幽谷、青山、延子となし、亦た實に翠軒の門下より出づ。

幽谷、名は一正、字は子定、通稱次郎左衛門、その先は參議小野篁より出づといふ。子孫世、商を業とし、三戸下谷に居る。幽谷幼にして、穎悟人に絶す、はじめ句讀を志、水元禎に受け、日に數百言を誦し、後、翠軒を師とし、學業日に進む。年はじめて十三、長久保赤水の壽序を作る、讀むもの嗟異し、稱して神童と爲す。翠軒、その才を奇とし、薦めて館生となす。時に年十五、その頃、讀孝經を著し、赤水、之を清人程赤城に示すや、赤城大に嗟異すといふ。又、潜鋒の保建大記を讀み、憤發興起、これより讀書を好むこと、他日に倍す。十八歲、正名論を著し、君臣の大義を言ふ。文公藩に就くや、數ば召し見、詩文を作らしめて、之を試むるや、筆を授けて、立どころに成る。公大に之を奇とし、累りに祿秩を進め、その後、召して藩邸に至り、國史を侍讀す。すてにして、事を言ふに坐して、職を免じ、數年再び史館に入り、編修に與かる。文公が志表を補ふに及び、幽谷に命じて、専ら其事を掌らしむ。武

公の時、擢んで、小納戸となし、編修の事を總裁す。幾もなくして、郡宰に遷り、編修を兼ね、公が新刻國史を天朝に獻するに及び、公に代つて表を爲る。後、郡職を罷め、再び總裁となり、二百石を食む。文政九年、病んで家に終る。年五十三。一男二女あり、男は即ち東湖、門人中、名ある者を會澤正志となす。幽谷、尤も君臣の義を重んず、恒に人に語つて曰く、天祖統を垂れ、天孫繼承、三器を奉じ、以て宇内を照覽し、皇統綿綿、天壤と窮なく、實に天祖命ずるところの如し、是れ神州の四海萬國に冠たる所以。天祖天孫、固より天と一なり、世世相襲ぎ、天津日高と號し、極に騰る、これを日嗣といふ。神天合一、殷周天に配し、なほ天と二たるを免れざるものと同じからずと。その國體を論ずるや、此の如し。幽谷素より邊事を憂ふ、當時干戈を見ざること二百年、文恬武熙、復た兵事を言ふものなし。幽谷謂へらく、滿清乾隆の西師、今を去ること二三十年、一水の外、大兵革を用ふること彼の如し、海内虞なしと云ふと雖も、しかも治安焉んぞ恃むべけむやと。乃ち西土詰戎記を著し、以て世の無事に安んずるものを警發せむとし、屬稿粗ぼ成りしが、多故にして、果さず。之を要するに、幽谷は慷慨氣節の士、善く水戸の學風を發揮せしものにして、その壯時、高山、仲繩、蒲生、君平に於ける、亦た明かに個中の消息を傳へしものといふべく、東湖正志が其學を承けて、尊王攘夷の木鐸たりしもの、固より偶然ならず。東湖の弘道



館述義回天詩史及び正志の新論は、水戸學の何物たるかを説明して、餘蘊なきものなり。但し兩人の傳は、餘白なきを以て、こゝに略す。

青山延子、字は子世、通稱量介、雲龍と號す。一號は拙齋、その祖興道、篤學を以て聞こえ、父延舜、善く其業を繼ぎしが、皆小官に終る。雲龍、幼にして機警、稍や長じて業を翠軒に受け、力を文章に肆にし、手づから柳文を寫し、文才大に進み、鎔裁卓絶、時に稱せられ、江戸に來り、平洲、北山と交を結ぶ。時に水戸の文學隆興、幽谷の輩、聲譽を擅にす、雲龍之と交り、鏞を齊うして並び馳せ、駸々として先を爭ふ、而して、文辭に至りては、皆雲龍を推して、擅長と爲す。文公、親ら大日本史を校し、諸生を督課して、史表を修せしむるや、雲龍、神祇志六卷を撰して、上り、武公の時、禮義與服、二志を撰す。尋いて、大日本史上梓の命あり、はじめて、刻本二十六卷を天朝に獻ず、雲龍與つて力あり。哀公の時、彰考館總裁に補せられ、業を爲す、甚だ勉め、又建言して、水戸藩史を修し、書名を東藩文獻志といふ。哀公未だ繼嗣あらず、その不豫に至りて、人心危懼、雲龍、執政と論じて合はず、乃ち公の書を齎らして、宗室守山侯に詣り、之と極論し、遂に烈公を立つるを得、人心はじめて定まる。烈公、弘道館を國に建つるや、雲龍を擢んで、小姓頭兼總教となす。雲龍、日に學館に登り、孜々として懈らず、すてにして、中風を患ひ、癒えて復た發し、遂に家に終る。享年六十

八。その子延光、又才學あり、家聲を墜さず。豊田天功、はじめ、幽谷の家に寓して學び、後、雲龍に知らる。天功、東湖、延光の三人、その齡、次第に一を少くし、殆んど兄弟の如く、平生相交ること密、水戸の學、この時を最も盛なりとす。而して、延光最も長壽、生きて明治の世に及ぶ。

水戸學の精神は、頗る諒すべしと雖も、その稍や褊狹固陋に失せしは、斷じて争ふべからず、これ後年黨禍を惹起せし所以にして、横井小楠の如き、又之を言へり。なほ烈公、東湖の政治上の意見等に就いて、探究すべきもの多けれども、こゝには傍徑に入るを以て、すべて省略に従ふ。之を要するに、維新の大業は、覇府創立當時に發生せし反抗的思想たる水戸學に鼓盪せられ、春山中齋等、陽明學派中、事功家の遺風を欽慕せし青年有爲の士の爲に實現されしものといふべく、その餘は、浮浪の徒、傀儡の起倒と毫も擇はず。而して、水戸は、その後、甚だ振はざりしと雖も、その首唱の功は、斷じて没すべきに非ず。嗟乎、生きて大名あり、死して美諡あるもの、必ず偉人ならず、騏驎馳すれば、蒼蠅も千里を往き、蛟龍躍れば、魚鼈亦た昇天の慶あり、是れ何ぞかの二三諸公の事に非ずといはむや。



## 第二十六章 林家の中興及び幕末の儒家

林家三世以後依然として其職に備ふと雖も、特に記すべきものなく、述齋に至つて中興の目あり。時適ま寛政異學の禁を布くに際し、因つて當時の官學たる聖堂を張皇し、之を林家より獨立せしめ、幕末の學教を維持せし功、固より稱すべきなり。林衡、字は叔純、一字は公鑑、幼字は熊藏、もと岩村城主大給氏支族能登守乘蘊の第三子なり。伯兄乗國、仲兄乘遠、皆歿し、述齋宜しく嗣を承くべく、しかも、幼にして善く病みしに因り、福知山侯の第二子乗保を養うて嗣となし、述齋家に在り、十餘歳に至つて強健、性を好む、父爲に時儒大鹽齋渚、服部仲山を招いて教督す。二人没後、獨學師なく、佐藤一齋と幼より伴友、ともに研學し、後、澁井太室に師事す。寛政の初、幕府政を新にし、述齋の名、上達せしに因り、將に用ふるあらむとす。會ま林簡順、卒して嗣なきにより、特旨、述齋を抽んで、其後を承けしむ。懇辭再三允されず、こゝに於て、幡然として作る、時に年二十六。その出づるや、首として建議し、聖廟を改造し、費館寮を建て、上下を區し、以て官私生員を増益し、司業を妙選し、風吏を置き、規模弘大、制度森嚴、昌平黌の制、はじめて備はり、學政

大に擧がる。文化辛未、朝鮮の使に對馬に應對して歸る、又、撰著を管して、編集するところ、極めて多し。述齋、人と爲り、度量恢豁、且つ膽氣あり、直言諫論、權要と抗す。その締交、稱して知己となすものは、皆一世の人豪、白河樂翁、堀田水月と相膠漆、四十年、一日の如し。天保戊戌、年七十一、老病を以て、兩殿侍講及び學事を解かむことを乞ふ、幕府其乞を聽き、猶ほ機務に參預せしむること、故の如し。居ること三年、宿痼纏綿、遂に卒す、年七十四。謚して快烈といふ。第三子、號は禪宇、家を嗣ぐ。號の子、昇、幕府最後の祭酒として、今なほ世に存すといふ。而して、述齋の門下に在りては、最も名ありしものを、佐藤一齋となす。

佐藤一齋、名は坦、字は大道、通稱は捨藏、又愛日樓と號し、老吾軒と稱す、江戸の人、父名は信由、一齋はその次子なり。これより先、信由、小菅氏の子、治助を養うて嗣となし、長女を以て之に配す、一齋生るゝに及び、治助又一齋を以て義子となし、因つて其家を繼ぐを得たり。一齋幼にして讀書を好み、又臨池の技を善くし、北條氏の兵、小笠原氏の禮、亦た皆之を修む。十二三歳の比、殆んど成人の如く、成童に及びて、嶄然頭角を露し、天下第一等の事を以て名を成さむと欲す。寛政二年、年十九、はじめて岩村藩の仕籍に上り、近侍の列に入る。この時に當り、一齋、林述齋と同じく學び、四歳の少を以て、幼より伴友た



り、長ずるに及びて、兄弟の如く、往來學を講じ、概ね虛日なし。又井上四明、應見、星阜の門に出入し、その講論を聞く時に世の學者、大抵該園の餘臭に染まざるはなし、是を以て、辨道、薙、燕二卷を著して、之を駁し、又孝經解意補義一卷を作る。二年八月、故ありて、職を免ぜらる。因つて仕籍を脱せむことを請ひ、十月を以て許さる。その翌年二月、述齋の徳憑によりて、浪華に遊び、間大業の家に寓す。大業歴數に精しく、兼ねて識見あり、一齋と相遇ふや、一見舊のごとく、又爲に介して中井竹山に學ばしむ。こゝに於て、日夜切磨、經義を討論し、或は夜半に至る。竹山以て厭ふべしとなさず、反つて、之を喜ぶ。竹山の長子曾弘、詞才絶倫、厩澤相質して、大に益するところあり。後又京都に遊び、皆川淇園に見え、六月家に歸る。竹山乃ち詩を贈り、又一行の大字を書して、之に與ふ。其語に曰く、困而後寢、仆而復興と。一齋その出處を問ふ。竹山答へて曰く、仆而復興は、王文成の語、首句は今紙に臨んで、自ら加へたるのみ、と。この一語、他日一齋をして程朱の舊より、陸王の新に轉せしめしこと、疑なきなり。寛政五年二月、江戸に還り、林簡順の門に入りて、その邸内に寓し、はじめ、儒を業とす。述齋毎に來訪し、與に講習をなす。四月、簡順歿して嗣なし、官乃ち命じて述齋をして、その後を繼がしむ。述齋こゝに於て、はじめ、師弟の名を正さず、然れども、日夜同學、なほ舊の如し、一齋専ら心を六經に潜め、傍、文辭を學ぶ、交道頗

る廣く、松崎慊堂、清水赤城市野隼卿等、皆一時の選、又僧大典と遊ぶ。文化二年十月、林氏の塾長となり、その門生を監督す。これより、門人益す進み、從遊の士、甚だ衆く、寮舎容るゝ能はざるに至る。然れども、耳提而命、講習倦まず、夜以て日に繼ぐ。その講經の日に當りては、聽衆堂に滿つ、述齋の子、輝宇を始とし、一齋に師事するもの、少からず。一齋の岩村に於ける、すでに仕を致せし後、職事あるなく、唯だ文學を以て、世子を輔導するのみ。文政九年、世子國を承くるや、擢んで、老職となし、以て國事を議せしむ。この時に方り、一齋の名聲藉甚、苟くも道に志し、文を學ぶもの、贊を其門に執らざるなく、塾徒は肥薩奥羽の人を併せて、同窓切劔、その質、一ならずと雖も、皆篤く信じ、聲音笑貌に至るまで、一齋を模倣するに至る。天保十二年、齡、古稀に躋るを以て、塵事を謝し、以て殘年を養はむと欲し、岩村侯矢藏の下邸に就き、數百歩の地を借り、新に書室に築き、名づけて靜修所といふ。又一樓を築き、名づけて東暖樓といひ、園中蕉桂を種ゑて、隱棲の所となし、往來安息す。七月、述齋逝去す、是を以て、悽然無聊、益す人世を絶つの意あり。この歲、幕府廢政を一新し、大に賢良を擧ぐ。十一月、擢んでられて、儒官となり、昌平黌の官舎に住せしむ。こゝに於て、幡然復た作る。その翌十三年、舊居を以て、女婿河田興に與へ、自ら居を官舎に移し、黽勉從事、後進を誘掖し、經義を講説し、敢て頽老を以て、之を人に委せず、海内



推して山斗となし、景仰せざるものなく、侯伯以下、聘迎講を請ふもの數十家、或は駕を官舎に枉ぐるものあり。凡そ士民の門に入るもの、無慮三千人、四月特旨を以て、易を將軍の前に講ず、辨説詳晰、賞命あり。これより國家漸く多事なるに従ひ、或は林祭酒を助けて外交の書を作り、或は幕府の需に應じて、時務策を作り、國政上、頗る裨補するところあり、幕府亦た常に之を優遇す。安政六年六月より疾み、九月遂に逝く、享年八十八。

一齋の門人、頗る多く、その中、著名なるもの、佐久間象山、吉村秋陽、山田方谷、奥宮愷齋、竹村悔齋、林鶴梁、金子得所、大橋訥菴、池田草庵、中島操存齋、柳澤芝陵、安積良齋、河田葆海等あり。一齋、資性平緩、學説の異同に拘らず、昌平塾の儒官を以て、紛糾百端の世を終ふ然れども、晩年陽明學に傾きしは、事實にして、その門人中、名あるもの、亦た然り。著述頗る多く、その中、特に重要なるものを言志四録となす。一歳壯歲にして、言志録一卷を著し、六十を踰えて同後録一卷を著し、七十にして同晩録一卷を著し、八十にして同盡録一卷を著す。この書もと語録にして、思想の斷片に過ぎずと雖も、不用意の間、亦たその本領を窺ふべく、邦人語録中の白眉たり。雨森芳洲の栢窓茶話、尾藤二洲の素餐録等、遂に及ばず、恐らくは、薛敬軒の讀書錄、胡敬齋の居業録と伯仲の間に在るべく、しかも餘姚に私淑するの意、書中に隱見す。

文政天保以後の經術、復た觀るに足らず。良齋等は、官儒として盛名ありしも、其職を重んじて、敢て門戸を立てず、却つて文章を以て推さる。猪飼敬所、古學を奉して、該博と稱せられ、その他、東條一堂、朝川善庵、徵引博涉、皆折衷の學なり。而して、文章經術を兼ね、且つ考據に精しく、斯文に大功ありしものを、松崎慊堂と爲す。又實に林家より出て、しかも幕末掉尾の一家たり。

松崎慊堂、名は復、字は明復、幼名は密、字は退藏、肥後の人。家世、農を業とす。慊堂、幼にして聰穎、數歲能く四書五經を讀む。父の意を以て、薙髮して僧となる。年十五、儒に歸せむと欲し、江戸に出奔し、その親族を捜せども得ず、還つて、武相の界に至つて、盜に遇ひ、盡くその囊銀を失ひ、彷徨して、三島に至り、寺門を欸いて投宿す。寺僧、その志を叩いて、之を憫み、書を作つて、之を江戸稱念寺の寺主、立門に托す。立門、その敏慧を愛して、僧たらしむを勸む、肯んぜず、立門、その奪ふべからざるを知り、厚く游資を給して、これを林簡順の門に入れ、昌平學に寓す。慊堂、氣力人を兼ね、經を治め、文詩を作るや、嶄然等輩に駕して之に上ぼる。居ること數年、林氏、その才名を聞いて、延いて家塾に致す。適ま佐藤一齋、亦た在り、相與に磨礪、切劘、學業益す進む。掛川侯、辟して藩の教授となし、食俸二十口。侯卒して、嗣君立ち、深く慊堂を識り、諮詢するところ多し。朝鮮の使、來聘するや、述齋に従



つて、對馬に之き、之と應對す。慊堂、學殖淹博、文辭瞻敏、韓客咸な敬服すといふ。肥後侯、慊堂が其國の民なるを以て、掛川侯に請うて、之を復せむとす。慊堂、之を謝し、遂に骸骨を乞ひ、山を府西の羽澤村に買ひ、茅を剃つて家す、謂ゆる石經山房、是れなり。すてにして、幕府召見の命あり、はじめ、將軍に見ゆ。即日、藩侯、爵用人を賜ひ、別に俸廿人口を給し、その後、時に朝請を奉ず。弘化元年歿す、年七十四。慊堂、はじめ朱註を奉ぜしが、晩年に至つて、深く思を漢唐に潜む。曰く、經訓坦明、炳として日星の如し、箋註茅塞して、大道乃ち荒む。これを古に復さむと欲せば、唯だ經を諷すると字を知るとに在るのみ、苟くも、然らず、文を望んで意を生じ、心を師として自ら斷せば、私意日に長じて、經義益す乖き、班志の謂ゆる碎義巧說に陥らむのみ。吾、學者として、専ら經文を弄び、その大體を存し、經を以て經を釋き、傳註に拘はらざらしめむと欲す。若し夫れ、訓詁の鑽研に至りては、之を説文に原ね、漢唐の註疏に參し、餘力以て三史文選に及ぶべし。かくの如くして、成らざるもの、未だ之あらざるなり。と。こゝに於て、開成石本十二經を把り、益すに孟子、大戴記を以てし、考訂して梓に上ぼす。又肥後侯に建言して、足利學校所藏の宋槧五經註疏を借り、之を上梓せむことを請ふ。侯、之を許し、直に着手せむとせしが、慊堂歿せしを以て果さず。まことに惜むべしと爲す。

慊堂の門下に、安井息軒、鹽谷宕陰、芳野金陵を出し、三人相繼いで、儒官に徵さる。息軒の經術、頗る博洽、慊堂侗菴以後、稀に見るところ、その著論語集説、左傳輯釋、管子纂詁の如き、夙に海外に知らる。又兼ねて文辭に妙なり。宕陰に至りては、その文、簡鍊勁拔、遂に前人を超越す。三人の中、宕陰ひとり早く死し、その他は、明治に入りて猶ほ存し、各後あり。これを、藩府官學の掉尾をなす。

明治の初、排舊の思想、一時に盛にして、舉世復た經史を談ずるものなく、諸老相繼いで、この間に凋謝す。その後、耆宿、漢學を以て博士の學位を得しもの五人、重野成齋は史學に長じ、島田篁村は經學の造詣淺からず、川田蕪江、經史を并せ、兼ねて文に妙。然れども、篁村、蕪江、今や亡し、他に根本通明は、易に精しく、三島中洲は通儒の面目を備ふるに庶幾し、碩果なほ存し、靈光巍然、差や人意を強うするに足る。後生躁進の徒、或は之を謂うて、塚中の朽骨となせども、一生の蘊蓄、優に典據たるべきに至りては、固より異論あるべからず、之を欽仰敬重せずして可ならむや。

## 第二十七章 化政以後の詩壇



山本北山は、護園の勢力を根柢より覆せしものなれども、偶も他人の爲に嫁時の衣を縫ひしに似たるものあり。文に於ては三博士、唐宋大家を準とし、聖堂風、天下を靡かし、詩に於ては六如寛齋を待つて、はじめ刷新の實を擧げたり、而して明詩に代るものは、實に宋詩の流行なりき。

六如は、京都智恩院の僧、名は慈周、近江の人、はじめ彦根の野東阜に従ひ、後、江戸の劉龍門に學ぶ、恒に木物二門の末流、時に虚飾多く、實際に乏しきを惜み、はじめ古轍を改め、頗る當時に盛名あり。享和三年歿す、年六十七。著すところ、六如詩鈔、葛原詩話等あり。菅茶山之を評して、近代の宗匠となし、曲園又その古艶にして、荀蔬の氣なきを稱せり。頼山陽の論詩絶句に曰く、泥犁口業未成空、呈佛低當彫琢工、栲叟草廬家數小、鉢盂還出渭南翁と、七律最も工にして、朗誦すべきもの少しとせず。紅藕入秋如病妓、青莎不夜有啼螿、青葙風生驚驟雨、白沙潮走誤晴雷、秋雪無端催髮髮、晨星容易滅交親、彈壓旅情憑酒力、支持衰抱策詩勳等、皆警句なり。

市河寛齋、名は世寧、字は子靜、一字は嘉祥、上毛の人、はじめ、林祭酒の門に入り、學成るや、昌平黉の學員長に補せられ、居ること五年、疾を以て辭して去り、寛政三年、富山侯の聘に應じ、教授二十餘年、老を以て致仕す。寛齋學博く才敏、その詩、清麗奇峭、兼ね有せざ

るなく、はじめ樊川を學び、一變して香山、再變して放翁、また諸家を鎔陶して、別に機軸を出す。之を一貫して、主奉するところは性靈に在り。その社を名づけて、江湖といひ、小島梅外、柏如亭、大窪天民、菊池無絃等、皆門下に出づ。寛齋性、山水を好み、上毛は桑梓の地、佳勝多きを以て、遊涉探計、盡さざるなし。晩に長崎に遊び、吳客と唱和す。文政三年歿す、年七十二。私に謚して、文安先生といふ。遺稿五卷あり、その詩、頗る自得の趣あり、たゞ推敲の足らざるを惜む。蓋し六如の尊ぶところは、實際に在り、寛齋之を進めて、清新となす、而して、天民無絃に至りては、纖巧に陥り、正に宋詩の弊を極む、こゝに至りて、自ら暴を以て暴に易ふの嘆なき能はざるなり。

大窪天民、名は行、詩佛と號す、通稱柳太郎、詩書を善くし、又墨竹に妙、之を以て四方に遊ぶ。はじめ、山本北山の塾に在り、小壺を以て酒を貯へ、時に出して之を飲む。一日外に出づ。北山塾を視、乍ち之を見て曰く、誰ぞや、我が門に在つて、この小磁壺を用ふる。凡そ小を好むものは、輿に天下の大を語るに足らずと。詩佛還つて之を聽き、怫然として復た出て、一大空尊を携へ歸り、之を案上に置き、酒少許を入れ、札々柄を抜ぬて、且つ斟み、且つ飲み、且つ放語す。その狂逸、率ぬ此類。又谷文晁と善し。著すところ、詩聖堂詩集あり、初編より三編に至る。すでに詩聖を以て堂に名づけ、一瓣の心香、之を少陵に奉ずるに



意ありと雖も、その作るところ甚だ相似ず、詩境超逸、行雲流水の致あるを見る。然れども、咏物を事とするに至りては、織に失するもの多し。その一を擧ぐれば、荷珠の一絶、倩誰採作掌中珍、碧玉盤堆萬顆銀、忍看微風吹過處、化成金谷墜樓人といふが如き、即ち是れ而して、五山に至りては、更に甚し。

菊池五山、名は桐孫、字は無絃、通稱左太夫、高松の人。江戸に出て、市河寛齋に學び、帷を下して教授し、特に詩名あり。文政中、高松侯、新に擢んで、記室となし、同姓半隱の後を承けしむ。安政二年、或は曰く六年歿す、年八十四。その著、五山堂詩稿及び詩話あり。宋詩織巧の弊は、五山に至りて、愈よ甚しく、唯だ工緻を事とするのみ。試にその二三を擧ぐれば、春雁に湖上落梅香已褪、隴間宿麥綠全勻といひ、秋鶯に柳絲減綠梭全廢、菊蕊分香衣自成といふが如く、題を掩うて、之を讀めば、全く謎語なり。その他、この類多し。

詩佛に咏物あり、五山に竹枝あり、以て當時葢園時代、古意少年從軍、閨怨の題目に換ふ、而して、その詩酒放浪、輕薄の習は、亦た往々にして、往年修辭の徒と相肖たるものあり。古賀精里、かつて其子穀堂が、鵬齋詩佛、五山等と舟を墨水に泛べて、賞遊を借にせしを戒めて、舟中の徒、皆鬼怪なりといひしもの、誠に其故なくむばあらず。五山、袁隨園に倣うて、詩話を著し、その錢を納れて、人の詩を収録すること、前に江村北海の爲せしと

ころに異ならず。山陽が、學吟爭題、五山知寸舌、權衡海内詩といへるもの、即ち是れなり。願れば、元和偃武の後、詩は丈山、元政、はじめて之を闢き、木物の二家に至り、一變して、唐明となり、然る後、享元の末流、何億陳腐に陥り、口を開けば、陽春白雪、聚星、投轄、萬口一辭、人をして臥さむを思はしむ。天明、寛政の宋元に於ける、すでに上に述べしが如く、織巧奇僻に陥り、聖得知、分外清、篇々相承けて、亦た人をして吐棄せしむ。こゝに於て、之に代るもの、清詩あり。

葛西因是の詩文に於けるや、金聖嘆の亞流と稱せらる、是れ期せずして、清人の風に染めるなり。之に次ぐものは、菅茶山にして、實に始めて王漁洋に尸祝すと稱す。茶山、名は晋帥、字は禮卿、備後神邊の人、家世、農商を業とし、學を好み、西山拙齋と同じく、京都に遊んで、那波魯堂に學び、又竹山、蝨菴と善し。後、郷に歸つて、教授し、其宅の東北に一塾を築き、廉塾といひ、又黄葉山に對するを以て、黄葉夕陽村舎といふ。福山侯、特に俸五口を賜うて、之を優遇し、生徒日に進む。その嘗て一たび東遊するや、三博士以下、諸藩の儒雅、皆交を容る、就中、頼春水父子と相善し。文政六年、大目付に進み、俸を加へて三十口に至り、十年宿痾を以て起たず、年八十、私に諡して文恭といふ。その集、黄葉夕陽村舎詩、前後二編あり、その詩、各體皆工なり、而して時を愛ひ、事に感ずるの忱、往々にして、行間に流



窮す。然れども之を一概して、務めて實際を愈し、淡雅穩秀、艱苦の態を見ず、洪纖兼ね備はり、その得意の候に至りては、往々にして、神韻超朗、自然に絶調をなし、正享諸大家の上に出てむとす。山陽の論詩絶句に曰く、朱絃疏越愛鏗鏘、風格誰爭老禮卿、大句寧無排累力、終然五字是長城と。

關東の詩運、すでに振はず、而して、關西詩を以て鳴り、蔚然家をなすもの、茶山の外に、廣瀬淡窓あり。名は建、字は子基、通稱求馬、豊後日田の人、はじめ時習を趁うて、摹擬自ら喜びしが、弱冠はじめて唐宋詩醇を読み、未だ卷を終へずして曰く、天地間、自ら此種の好詩ありと、因つて、舊業を棄つ。はじめ、龜井昭陽に學び、後、その徒を延いて教授し、前後籍に上るもの四千餘人、宜園の名、鎮西に高し。大村府内の二侯、禮を厚うして、之を延き、待つに賓師の禮を以てす。安政乙卯歿す、年七十四、私に謚して文立といふ。淡窓、老子を喜び、析立の著あり、その詩は、遠思樓詩鈔、初編二編あり。篠崎小竹、之に序して曰く、近世善く後進を教育するもの、山陽に於ては、茶山菅翁を稱し、九州に於ては、淡窓廣瀬君を稱す。四方の士、争つて其塾に就き、皆成るところあり、而して後歸る、その業とするところを叩けば、詩に由つて入るもの、多きに居る、以て其人と爲りと、其詩たる所以とを知るべしと。論詩五古一首、この道に於て、三たび肱を折るを知るべし。その末に曰く、我亦

丈夫也、李杜彼爲誰、誰明六義要、以起一時衰と。然れども、その規撫するところは、元白率易の調にして、平淡の中、自ら精彩あり、たゞ家數甚だ大ならず、彦山に日暮天壇人去盡、香煙散作數峰雲といひ、追懷南遊に乳狼夜半來尋食、一徑菅茅踏有聲といふが如き、世に傳誦さるゝと雖も、都府樓瓦の七古の如き、最もその才力を觀るに足る。

淡窓の弟に旭莊あり、名は謙、字は吉甫、別に梅墩と號す、大阪に住し、詩を以て名あり、文久三年歿す、年五十七。梅墩詩鈔十二卷あり、宜園一派の詩、旭莊に至りて、はじめ、其大を成せり、愈曲園、之を評する、最も詳、曰く、吉甫才氣橫溢、變幻百出、長篇大作は、五花八陣の奇を極め、而して、片語單詞、又雋永味ふべし。鐵硯學人齋藤謙稱すらく、その構思、泉の湧くが如く、潮の渦くが如く、その口吻に發し、筆端に上るに及べば、馬の坡に注ぐが如く、雲空に翻つて、風葉を捲くが如く、多と雖も濫ならず、長と雖も冗ならずと。洵に吉甫の詩を知るものなり。吉甫、塵務を擺脫して、仕途に入らず、親むところは、墨客騷人、好むところは、江山風月、宜なり、その東國詩人の冠たるやと、又曰く、吉甫、詩律に於て甚だ細、春夜聞雨の詩あり、濕及琴書際、暖回衾枕中といふ、初稿及の字、是れ入の字、後、之を改む。或は故を問ふ、曰く、その梅雨の詩に似たるを嫌ふのみと。これ亦たその浪りに才情を使ふに非ざるを見るべしと。その詩の美、一一擧ぐるに堪へず、而して予は、潜龍洞伏



虎巖拈花峰の五古と、除夜祭詩丙午元日の七古とを愛す。淡窓の義子青村旭莊の子林外、又ともに詩を善くす。村上佛山、亦た豊前稗田の人、龜井昭陽に學ぶ、即ち淡窓の同門なり。又詩に長じ、明治十二年歿す。宜園門下、又名士多し。中島子玉、雋才を以て稱せられしも、早く夭す。竺五岳、詩書畫を兼ねて、一時に名あり、他に長梅外三洲の父子あり。鎮西の詩、宜園之を剽め、その餘韻、今に至りて、なほ存す。

茶山淡窓と時を同うし、頼山陽は、詩文を以て、華洛の主盟たり。篠崎小竹、その詩文を評して、名を得、又博物を兼ねぬ。その人、頗る俗なりと雖も、その作、亦た傳ふべきものあり。南紀には、寛齋門下の菊池溪琴あり、又一家をなす。之と相和するもの、仁科白谷あり。其人、太だ偉、詩亦た遊覽の作多く、格力極めて高し。之と前後して、中島棕隱、草場佩川、藤森大雅、山田變堂、野田笛浦、齋藤拙堂、後藤松陰、坂井虎山、藤井竹外、奥野小山、大槻盤溪等あり。或は詩を以て業となし、或は文を兼ねぬ。然れども、未だ一人の梁川星巖に及ぶものあらざるなり。

梁川星巖、名は孟緯、字は公剛、一字は無象、詩禪道人と號す。通稱新十郎、美濃安八郡會根村の人、享保三年、再めて十五、家を弟某に附し、江戸に遊び、業を山本北山、古賀精里の門に受け、幾もなくして歸りしが、二十二、又江戸に出づ。星巖、最も詩に長ず。當時詩佛五

山、最も名あり、而して、星巖は、溫雅深厚、二雅の風あり、主として、唐詩を學ぶを以て、却つて之を壓すに至る。後に其妻張氏、紅蘭とともに四方に吟遊すること二十年、長崎に在るや、清客江芸、閑等と唱和す。すてにして、復た江戸に還り、玉池吟社を建て、諸生に教へしが、後、京師に移り、鴨漕に住し、頼山陽と相驢ぶ。山陽、一世を藐視して、名を擅にす。而かも、詩に於ては、星巖を推す。星巖、又かつて曰く、余が名をなすものは、子成なり。子成の詩を成すもの、余、功なしとせずと、こゝに於て、二人、各所長を以て、山斗の目あり。嘉永中、米艦屢ば來りて、互市を請ひ、幕府詔を矯めて、政を失ふこと多し。星巖、もと慷慨の志あり、これを憂ふること甚し。安政五年秋、閣老間部詮勝、京師に上り、處士を逮捕せむとす。星巖、慨嘆の詩二十五首を作り、以て時弊を譏る。すてにして、疾に罹り、その歲九月歿す、年七十。著はすところの星巖集、甲より戊に至る二十五卷、閩集一卷、遺稿八卷、別に春雷餘響十卷あり。

星巖、精思績學、力を用ふることに厚く、從來宋を學ぶの淺俗を排して、唐人を宗とす。詩律精嚴、前古に匹なく、卓として、一代の鉅匠なり。而して、その風骨俊俏、才調清麗なるもの、實に近世清人と相類す。おもふに、力を清人に得るところ多きに拘らず、其舊に従つて、假に唐を標榜せしに非ざるが、その詩、風月に留連し、登臨憑弔するの作多く、境地變



化して窮まらず、林鮫の序に、煙霞風月を以て室宇となし、江湖山林を苑囿となし、鳥獸禽魚花木竹石を臣僕姬妾となすといふもの、決して謬らず。諸體兼長、就中七律に於て、最も造詣を見る。その佳聯、燈影最宜秋冷澹、酒香剛稱夜氣氳、鶴閒益見昂藏氣、琴古方成疏泛聲、夜靜溪聲微入戶、天寒月色儂籠花、寒風有力吹沙走、枯葉無聲借雨鳴、左計應問棋敗局、養心聊學筆藏鋒、漉花網已先春結、載酒船應待月剗、千樹葉紅寒水見、一絲髮白夕陽知、詩境或從貧後進、酒杯未肯病來拋、青意漸回人字柳、東風微峭虎文波の如き、清辭麗句皆誦すべきなり。星巖晩年深く心を道學に潜め、就中姚江の學を喜ぶ。遺稿後編四卷すべて論學の詩なり。これを以て淡窓が老莊の學を好み、杏坪が宋儒の理學に耽りしに比す、まことに好一對なり。星巖の室紅蘭、又詩を善くす。閩房倡和、當時之を艶とす。小集二卷あり。

星巖は、寛政以後の大詩人にして、その門に出てしもの、大沼枕山、小野湖山、森春濤、岡本黄石、遠山雲如、江馬天江、鈴木松塘等あり。維新以後の詩家、大抵三大派をなす。その一は鎮西宜園の末流、その一は岡本花亭一輩の門に出てし江戸詩客中の遺老、洛より以西、往々にして茶山の詩風を傳ふるものあれども、未だ大家を出せしを聞かず、その他最も名あるものは、すべて星巖門下なり。枕山下谷吟社を創し、頗る勢力ありしが、晩年

頗る頽唐、その門下の雪江、蘆洲、すでに逝き、湫村以下は論ずるに足らず。湖山、黄石、靈光、なほ巍然たれども、その門、亦た才俊を出さず。松塘、墓木すでに拱す。明治以後、森春濤、とり名あり、その柴荆巷、回處に於て、新文詩を發刊し、東京才人絶句を編したるが如き、風雅を奨進したるの功、固より大なり。春濤逝いて、すでに十年、令嗣槐南、箕裘を嗣ぎ、その名、海の内外に震ふ。方今詩を道ふもの、皆之を宗とす。而して、主奉するところは、皆近清の諸家、之を前にして、吳梅村、之を後にして、吳蘭雪、頃ろ、坡谷を學ぶに意ありといひ、或は以て詩壇革新の兆となす、その言、或は然らむ、予輩は刮目して、その前途を囑望せず、むばあらざるなり。

## 近世漢學史終



62  
404



信  
大  
教  
三  
九  
二  
九



